

---

Out Of Control **制御不能**

佐川伸竹

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Out Of Control 制御不能

### 【Nコード】

N3972N

### 【作者名】

佐川伸竹

### 【あらすじ】

至って普通の生活をしていたはずの式場壮は玄関に銃を構えて立っていた自称テロリストの少女、笹村絵真ささむらえまに脅され、テロに加担させられる羽目になってしまった。戦いの中で壮は、普通あり得ない現象を引き起こす「能力者」と出会う。

1 - 1 「ありえること・ありえないこと」(前書き)

この小説はフィクションです。実際の事件・団体等には一切関係ありませんが作者のボキャブラリーのなさにより登場人物が友達の名前だったりします。が、あくまでもフィクションです。

## 1 - 1 「ありえること・ありえないこと」

一、7月21日、11時26分、ある中学生の自宅

夏。真夏。こんな日にクーラーが壊れるんだから神様は自分の事が嫌いなのかもしれない。

式場壮、(しきばつかさ)は麦茶一杯で暑さをしのぎながらソファに寝転がって高校野球を見ていた。

「あなた病み上がりでしょ？」と母に扇風機を止められたので体は沸騰寸前だ。「熱中症になる」と言ったら食塩の入った箱を渡されて「これで熱中症は大丈夫！」と言われ、「鬼め」と毒づいている間に母は友達とお茶へ行ってしまった。

そんなわけで現在このくそ暑い家には自分一人だ。部屋全体が湿った熱気で覆われていてテーブルの上に置いてあるコップに着いた結露がみるみる減っていった、麦茶が超高速で温くなっていつているのがよくわかった。

「アイス買ってくるから」と出て行ったがどうせ忘れてくるに違いない。コップを取って麦茶を口に含むと案の定温くなっていて、麦茶独特の香ばしい匂いが気だるく鼻に突き抜けた。

この暑さで香ばしい匂いは必要ないだろと思いつながら壮はテレビの音量を少し上げる。13 - 2、名門 対 部員十一人の無名校だし当然といえば当然だろう。もう五回表一死だし勝てそうな気配もない。むしろ二点取ったことをほめるべきだ。

弱いものは勝てないとか夏は暑いとかそういうのは普通といえば普通。というか寒い夏や弱者の勝利は問題だ。この世において「普通起こるはずが事はたいてい起こらない」は鉄則。

そうでなければこの世のバランスが滅茶苦茶になってしまう。そう考えてみると自分の今、この状況も普通なのかなと中学二年生らしく意味不明な感傷に浸ってみる壮だったが暑いものは暑い。当然か

どうかなんて関係ない。

今なら「暑い」と言ったら「当たり前でしょ夏だもの」と返す奴をぶっ飛ばす自信がある。あまりの暑さにたえかねたので、むっくと立ち上がって冷蔵庫に麦茶をおかわりしに行く。使い古したソファの反発力のなさを感じた。

冷蔵庫を開くと中から冷たい風が流れてきて「冷蔵庫の中で過ごしたい。あ、凍死するか」なんてことを思いながら麦茶の入った容器を手に取る。当然だがおかわりしたての麦茶は冷たかった。結露したコップの冷気を手で受けながら五歳児ぐらいのコップが大きすぎて片手で飲めない子がそうするように両手を使ってごくりと飲む。冷気が体を順々に伝っていつて心地よかった。

麦茶の容器を元に戻して冷蔵庫を閉じ、再びソファに戻ろうとするとインターホンが聞こえた。宅急便か何かだろうか。今の恰好はTシャツに短パンだからOKではないがセーフだろうとフローリングをぺたぺた歩いてドアのほうに向かう。

良く考えたらソファに座らずにフローリングに寝転がっていた方が冷たかったということを見したので後で試そう。後ろから歓声が聞こえたから負けている方がヒットでも売ったのだろう。もっとも、勝つなんてことはないはずだ。それが普通だ。今、自分がドアを開けても別にテロリストがいるわけではなくかセールスマンか、宅急便の宅配員か、宗教の勧誘員が出てくるだけであるように、残り二死で11点も返すのは不可能なのだ。

鍵をゆっくりと外す。さて誰だろう。たとえ誰だったとしても自分に用などないだろうから「母は留守です」と責任を押し付けられたいだけだ。少しずつドアを開くと外の熱気が中に吹き込んできて壮の顔をなでた。

「はい、何でしょうっツ…!!」

少年は絶句する。ドアの先、自分の目の前に立っていたのが、立っていたのはセールスマンでも宗教勧誘員でも宅配員でもなく、

拳銃を持った少女だったからだ。

ホームランが出たらしく、後ろから歓声が聞こえた。  
ひよっとしたら逆転するのもかもしれない。

二、7月21日11時30分、式場宅

「麦茶しかないんですけどいい……ですか？」

「ああいいよ、おかまいなく」

相変わらず暑い。蝉の鳴き声はますますうるさくなり、ジージーというぎざぎざした音が耳の中に反響していた。少女はフローリングにちょこんと座って足をぶらぶらさせながらももらった麦茶をちびちび飲んでいる。

何で自分はこの娘を家に入れてしまっているんだろう。もう少ししたら出かけたかったところなので正直さっさと帰ってほしいのだが、麦茶を飲んでいないほうの手には未だに銃が握られているので文句も言えない。テレビでは無名校が驚異の逆転劇で名門を下してしまっているしもう何がなんだか分からない。

「やっぱり暑いときは麦茶だよ、」

と少女は笑顔を見せた。その笑顔には不似合いな黒い塊はもう安全装置が外れており、引き金には白くて細い柔らかな指が引っ掛かっていた。

「は、はあ」

「どうしたの、つかさ君？元気ないよ。どこが悪いの？」

「まあ、病み上がりではあるけど」

「ああ、そういえばそうだったね」

「あ、あの？」

「何？」

「笹村さんだよな？」

「そうだよ」

そう、笹村絵真、（ささむらえま）。この銃を持った少女は壮のクラスメイトだった。最もクラスの中心になっていろいろ話している彼女といつも自分の机にハンターに撃たれたクマみたいにくったり覆いかぶさっている壮とではえらい違いだが。

ではなぜ彼女が銃を持って自分の家にあがり込んでいるのか。壮には全く分からなかった。ただ、当の本人は人の家のリモコンをピッピやって自分の見たいお昼の番組に切り替えてけらけら笑っている。麦茶はもう全部飲んでしまったようだ。

「あ、あのさ。何で銃持ってるの？」

勇気を持って聞いてみた。そんなに突拍子もない答えは返ってこないはずだ。父親のコレクションとか道で拾ったとか多分そういう物のハズだ。というかそうであってくれ。

絵真は少しきよんとして、少し自分の右手に握られている銃に目を落とすし、

「あー、私テロリストだから」

空気凍結。いきなり訳わかんないことを聞かされた式場少年は口を半開きにしたまま「は？」と少女を見ているし、爆弾発言をした少女も少女で「それが何か？」という感じで首をかしげている。

「え、えーと、もう一度聞くよ。……てるりすと？」

「うん、テロリスト」

「へ、へえ」

壮は必死に頭をフル回転させてテロリストという単語を正当化させてみる。

「（痛い子が、痛い子なのか？良く考えたら痛くない子が人の家のリモコンをピッピやらないような気がする。いや、でもこの人普段は別に痛い様子もないし・・・あ、あれか！クラスとか学年単位で流行ってる何かの隠語か！？そうだ、きっとそうだ。俺はずっと机でうつ伏せだから知らないけどきつとそういうものがあるんだ。銃っぱいものを使ったゲームか何かだな！なるほどお（

でさ、テロリストって何のことなの？」

なんとか自分の頭で処理しきった壮はやや食い気味で聞いてみる。

「何？テロリストも知らないの？」

と絵真はあきれた顔で聞き返してきた。

「ご、ごめん。あんまりそういうのはわかんないから」

「テロリストっていうのは特定の思想のもとそれを達成するためにビルを爆破したり政治家を襲撃したりする人の事だよ。」

「え、マジテロル？」

「マジテロルって何？」

ちなみにテロルというのはテロを行うことだから壮の使い方はあなたが間違っではないのだが、まさかマジテロルとは思わなかった。というか何でこの少女は平気な顔してビル爆破という単語を発することができるのだろうと思ったが、銃も持つてることだし、どうやらマジらしい。

「で、笹村さんは何でテロリストなの？」

ちよつと興味が出てきた壮は覗き込むように聞いた。絵真は「よくぞ聞いてくれた」というように自信満々に話し始める。

語るときにこれだけ自信があれば自分もクラスの真ん中に立てるのかなと全然関係ないことをふと考えてみたそうだったが自分が聞いたことだしまじめに聞くことにする。

「つかさ君、まずこの国がどこかわかる？」

「日本」

「正式名称は？」

「神御国属国日本王国です」

読み方は「かみのみくに・ぞつこく・にほんおうこく」だ。神御国は神を元首とする国だったらしい。らしいというのは授業でしか習っていないし、壮はその授業をまじめに聞いていないからよくわからないのだ。

「そう、178年前、日本・米国・中国・EUその他諸々ほとんどの国は神御国に占領されて独裁国家になりました。その結果、民主主義もへったくれもなくなっただけだよ。」



「民主主義？なにそれ？」

「壮はきよとんとする。今の学校では民主主義はおるか政治の事すら教えられていない。神の代理である「王」にしたがっていければ万事うまくいくという教育がなされている。」

「で、だね。今ってさ、無神論者っていうのはどうなる？」

「死刑でしょ」

「無神論者というのは何の宗教にも属していない人ではなく、国の政策に反対する人の事である。神御国傘下の国ではすべての宗教がとつくに解散してしまっているのでそういう使い方しかない。」

「そう正解。まずこれが思想・文化・宗教の自由を奪っているわけだよ。で、それを快く思わない人もいるの。そういう人が集まっているのが私の所属してる……」

「神御国反乱軍Peace Maker」

「あ！わかるんだ」

「ほ、ほら、高校野球って間にニュースやってるから」

「Peace makerのニュースはいたるところで聞くからわかる。神御国に占領されていない国とそこに亡命してきた人々からできた軍らしい。」

「テレビで見る映像はたいいてい戦闘機や戦車を並べてドンパチやっているものだからあまりいいイメージがないがとにかく大きな組織であることだけはわかっていた。」

「ところで宗教って何かわかる？」

「急に正解を答えられて悔しそうにしていた絵真が意地悪そうに聞いてきたので壮はおとなしく首を横に振ると、絵真も「私もよくわからないの」と「わけわかんない」のポーズをして首を横に振った。」

「ところでそのテロリストさんが俺に何か用があるの？」

「だいぶ落ち着いてきて耳の中に蝉の鳴き声を取り戻してきた壮はテレビのリモコンをいじってプロ野球のデイゲームに切り替える。絵真は思い出したように」

「あ、そうそう。今日麻薬取引があるからそこをぶっ潰しに行くの。」

「ふーん、輸送を手伝うんじゃない？」

麻薬取引とは物騒な話だなと思ったがさつき自分に銃口を向けて立っていた人間が何を言っても、もはや特に動じない。

「人聞きの悪いこと言わないでよ。私の目的は世界のみんなを幸せにすることなの。」

「ごめんごめん、で、何でうち来たの？」

壮は麦茶を一口、口に含む。何とも言えないぬるさが口内を一周し、飲み込もうとした時、

「つかさ君に手伝ってほしいの」

思わずせき込む。液体がいろんなところに逆流してむせ返った。絵真は「大丈夫？」という感じで背中をさすってくれたがそれどころではないだろう。

「なんで？」

げげげせき込みながらもようやく落ち着きを取り戻した壮は眼を見開いて聞いた。

「なんとなく適任っぽいじゃん」

冗談じゃない。自分にはこれから用事があるのだし、たとえ用事がなかったとしてもなんだって麻薬取引の現場なんかに行かないといけないんだ。丁重に断らないと

「笹村さんの意見は素晴らしいと思うんだけど俺にはちょっと似が重いつていうか、そ、そうだ。そもそも俺と笹村さんってそんな仲良くないしクラスでもほとんどしゃべったことないし、それに俺は別に特別なことができるわけじゃないし、あと俺さ今から用事が・

・

思わず口が止まる。なぜなら絵真は自分に、銃口を向けているからだ。当然引き金には指が添えられている。

「え、えーとあの？」

「命が惜しかったらついてきて」

一度だけ縦にこくりと頷いた。蝉の鳴き声はさらに強くなっていく。

頭がおかしくなりそうだった。

三、7月21日午後12時5分 ひるがお市・市街地

「なんでチャリで来なかつたの？」

「えー、なんかめんどくさかつたし」

「にけつの運転手側がどれぐらいかわかってよ」

その後の「家から歩いてきた」発言によって家が意外と近いことと彼女の計画性のなさを理解した壮は、自転車の後部座席に女の子を乗つけて漕ぐという一大行事を体験することになったのだがそんなことには慣れていないし、筋力はないしでだいぶ体力を使った。

横でせえぜえ言っている壮をしり目に絵真は太腿のあたりについているホルスターを銃が外しやすいようにいじくりまわしている。何かいろいる見えてるし、もう少し人目を気にしろと言いたかったが本人も真剣そうなので自重しておく。

「ところで何で制服なんかに着替えなきゃならなかつたの？」

出かけると決まったらすぐに「着替えて」と言われ、制服に着替える羽目になった。洗濯のりのパリパリした触感がうっとうしい。そう言えば彼女も制服だった。

「で、どこ？その取引場所っていうのは」

「ん、あのビル」

少女はホルスターをいじる片手間に目の前の施設を指差す。あまりぱつとしない市街地の中ではかなり目立つビルだ。ご大層に大きな駐車場とそれなりの門が立っている。石造りの門には施設の名称が彫られている。

「えーと？王立産業振興センター・・・ここ公共施設だよ!？」

「うん、だから制服なんだよ」

「だって、こんなところでやったら普通バレない？」

「バレないよ」

「何で？」

「麻薬取引をしてるのは国だもの。あ、正確には麻薬じゃなくてそ

れに似たものだけだ」

「何で国はそんなことしてるの？」

「さあ、国の人に聞けば？絶対に消されるけど」

そう言うのと銃をしまい終えた絵真は問題の施設にすたすた歩いていく。その後ろ姿は妙にりんとした緊張感を帯びていた。しばらくそれに見とれていた壮は、はっと我に帰って後を追う。

「で、僕の仕事ってというのは？」

「まず私たちはやくざの下っ端って設定だから。こういう危ない取引の時、大抵の暴力団は小さい子供を利用して取引を行うものなので、その担当だった子と役割を変わってもらったわけ」

「その子は？」

「殺されたに決まってるでしょ？生かしても意味ないし」

少しびっくりしたがそういう世界の話なのだろう。これ以上聞いても仕方がないような気がした。

「で、つかさ君はこの鞆持って。この中に麻薬が入ってるって設定だから」

絵真はどこにでもありそうな学生鞆を渡す。受け取るとどっしり重かった。

「重つ、何が入ってるの？」

「爆弾」

「・・・何か本格的にテロリストだね」

「当たり前でしょ。これを麻薬受け取り担当の国の役人に渡すと見せかけて起爆させるから」

「起爆つて、僕が？」

「それは私がやるけど現場まではあなたが持って行って。色々やりたいから」

「・・・了解」

「あ、あと一つ」

「何？」

「何があっても絶対驚いちゃだめだよ」

「爆弾とか銃とかさんざん聞いたからもう大丈夫だよ」

「もし仮に相手が物体を発火させてもテレパシーで精神干渉してきても絶対に、だよ」

「う、うん」

そんなことあるはずないだろうと思ったが絵真の話し方に妙な緊張感があったので、無視できなかった。さっきからありえないことばかり起こっているんだ。それぐらいは覚悟しないと。自動ドアが開いて二人の影が消えた。

四、7月21日午後12時25分 王立産業振興センター

「（うわー、ホントに黒服とか着てるー。これはこれで目立つと思っただけだな）」

少し開いた部屋、広さはバスケットコートと同じぐらいで結構薄暗い。普通業務にこんな部屋いらないだろうから、もしかすると取引専用の部屋なのかもしれない。入口付近に立っている壮と絵真の前方には黒い服の男が五人、一人のリーダー格のようなメガネの男以外はサングラスを着用。もちろん肩幅とかが半端じゃない。殴られたら死ぬんじゃないか。

鞆を持つ壮の手はじつとりと濡れていた。おかしい、「冷房は効いているはずなんだけどな」と手をズボンで拭う。何度やっても汗が拭いきれない。

「（緊張してるのかな）」

鼓動が高まっていくのがはっきりとわかった。でもビビっちゃだめだ。少しでも取りこぼしがあれば死ぬ。そんな雰囲気的空間全体を支配していた。

「お持ちしました」

と絵真は低い声で言う。その声は部屋全体に薄く反響して吸い込まれた。

「では取引にしよう。まず薬を渡せ。その後、その鞆に金を詰める」

メガネの男は黒い眼鏡のフレームをいじくりまわしながら言う。癖なのだろうか。

「いいえ、まずは金を渡してください。その後、薬を渡します」

絵真ははつきりとした声で言った。爆弾を見られたら元も子もないからそれはそうなのだが、多分この子も緊張してるんじゃないだろうかと壮は考えた。そうすると自分の緊張がほんの僅かにほぐれるような気もしたが多分、気のせいだ。

「断った場合は？」

「交渉決裂ですね」

「・・・では、言うとおりにしよう」

メガネがそう言うのと絵真の目の前に札束が現れた。どうやって出したんだ。と思ったがそんなこと言っている場合ではないだろう。壮はできるだけ汗を拭いた後、鞆を絵真に渡した。絵真はその中身を確認し、何かガサゴソやった後（起爆装置を作動させたんだと思う）、メガネ男に投げつけた。

「伏せて！」

少女は壮にとびかかってきた。何か柔らかい感触を感じたがそんなことは言ってもらえない。そのまま押し倒される。

部屋に爆音が轟き、強い風が二人を叩いた

「（・・・あれ？）」

おかしいぞ、そうは思った。あっけなさすぎる。あれだけ大きな爆弾だったらそれなりの威力があっけいはずだ。ゲームの手榴弾しか使ったことのない壮にもそれはわかった。爆風で吹き飛ばされて壁に叩きつけられてもいいはずだ。それなのに、

実際には少し強い風が吹いただけだ。起きるはずだった爆風は「まるで何かにかき消されたように」かき消されてしまった。こんなこと・・・ありえない。

「透視能力者クレハボヤンスの一人でもつけておくべきだったな」

メガネ男だった。無傷。手には銃を持っている。他の黒服も同様に、だ。

「作戦失敗だね？お嬢さん方」

メガネが得意げに言ったその時、絵真が不意に立ちあがってホルスターの銃を引き抜き二、三発発砲した。銃を引き抜くときにスカート下の水玉模様が思いつきり見えて、なんか妙な気持ちになったが、とはいえ普通ならもうメガネは立っていられない。

しかし、メガネはその場で銃を構えたままだ。

まっすぐメガネ男に向かっていていた銃弾は目標に当たる前に減速していき不自然に軌道を変え地面に落ちたのだった。それは普通、あり得ない現象だった。

絵真は一発、もう一発と銃を売ってついには銃に入った銃弾を全部撃ち尽くす。なのにメガネ他、黒服達には傷一つない。皆、軌道を変えてあらぬ方向へ行ってしまうのだ。

メガネ男は不敵に笑う。

「無駄な抵抗はやめたほうがいい。おとなしく降伏すれば楽に殺してやらんこともない。わかったらおとなしく降伏しろ、反乱軍のゴ  
三共」

銃の安全装置が引かれた。

五、7月21日午後12時30分 王立産業振興センター・ある一室

どうしよう？

突然クラスメイトに銃で脅されて国の役人を襲撃を手伝わされることになったと思ったら、爆弾はかき消され、相手が何らかの方法で銃をねじ曲げてきて、襲撃が失敗し、黒服×5から銃を突きつけられている。というとんでもないぐらい絶体絶命な状況に立たされた壮は、横目で自分を連れだした張本人のほうを見た。いや、いくらなんでも組織に属しているわけだし何か策ぐらいあるだろう。ゆっくりと目を向けると、

少女は両手を上げて震えていた。

「（ええ~~~~~・・・）」

戦意がかからも感じられない。ひたすら手を高くと上げて「助けてください」と連呼している。ちょっと待ってくれよ。この状況はやはり。冷静に考えてみると自分たちの行動は完全に国家反逆行為だし、相手ももう既に「殺す」という単語を発している以上、多分殺すのだろう。冗談じゃない。こんなところで自分は死ぬつもりはない。でもこの状況ではどうしようもない。たぶん一歩動いたら撃たれる・・・どうしよう？

「最後に聞きたいことがある」

メガネ男は深く落ち着いた声で言った。最後にということとはもう殺すんですねと壮は絶望したように、というか絶望して下を見た。

「依頼主の名前を教えろ、どうせ最後だ。多少お国のために役に立て」

「い、言うわけないでしょ・・・」

「小僧、おまえは？」

メガネ男は少し期待交じりに聞いてきたようだが、自分は絵真に脅



されて半ば飛び入り参加状態なのでそんなこと知らない。が、この状況で「知りません」なんて言うのは癪だったので、「言うわけないだろう！」と言おうとしたら「言うっ」のあたりで、

銃声。銃弾は壮の足もとにぶち当たって粉々に砕け、鋭い金属音だけが耳に残る。

「チツ、ガキだと思つて期待してたんだが、無理か。拷問にかけてもいいが、めんどくせえし、お前らにはここで死んでもらう」

メガネ男他、黒服達は銃をこちらに向けてきた。銃口は意外なほどポップな丸みを帯びていて、壮はそれをじつと見つめていたが、やがてその穴から責め立てるように恐怖が湧きあがってきて、壮の内臓の奥を気持ちの悪い冷たさが満たした。

「小僧、最後に何か言うことはあるか？」

「助けてください・・・」

どうにか体裁を取り繕おうと考えたが、それしか出てこなかった。得体のしれない不気味な感所が足元からはうように自分の全身を包んで、どうにもならないくらい震えていた。どうにかして手を固く握ろうとするが震えでうまく形がとれない。怖かった。

メガネ男は憐れむように壮のほうを見てから絵真のほうを向いて同じ質問をする。

「何か最後に言うことは」

「却下」

「え？」と思わずつぶやいてしまった。場の緊張した空気が張りすぎではじけたように一変する。「何言ってるんだこいつは？」と全員がはつきりと少女のほうを見た。

「何が却下なのか分からないんだが」

「何が却下って、まず死ぬことは却下、私まだやることあるから。」

後、依頼主つていうか私の上司の情報も言いたくない。それに何よりこんなところについてまでもいるのは死ぬほど退屈。怯えたふりしても何の情けもないしこんな所についても無駄だから却下、全部却下

「！」

全員が度肝を抜かれていた。壮は「やっぱり痛い子だったんだな」と少女を不思議な目で眺望している。メガネ男は口を4分の1開きぐらいにして呆れていた。

「……、自分にそんな選択権があるとしても？」

「もちろん！」

少女は自信満々だ。どこをどうしたらそんな自信がわいてくるのかと壮は思ったがとにかく、今、この状況は彼女に懸けてみるしかない。それ以外に方法もないし、思いつかない。

「なら見せてもらおうか。君がどうやってこの場をくぐりぬけるかを！」

メガネ男は銃を構える。「ついにマジになったか」と壮は身構えたが、一応、もう吹っ切れている。今、自分にできるのはどうにかして生き残る努力をすることだけだ。奥歯をかみしめる。

「つかさ君！」

「なに？」

「逃げるよ！」

「どうやって？」と聞く前に少女は壮の腕を掴んでスカートから取り出した何かを地面に叩きつけた。それは地面に当たると二つに割れて白い煙をまき散らし、部屋全体を瞬く間に満たした。

「（煙幕だっ！）」

「（早くっ！）」

絵真は壮の腕を引っ張って出口に突っ込む。が、二人が三歩、走ったかどうかで部屋に突風が吹き、白い煙はかき消された。すると銃を構えた黒服の姿が見え、同時に銃声が鳴り響く。銃声は12発。一発が壮の頭をかすめた以外はすべて外れ、二人は部屋を全速力で出る。絵真はとっさにドアを閉め、部屋に鍵をかけた。

「早くっ！」

「わかってる」

二人は再び走りだした。施設の外へと

六、7月21日午後1時2分 ひるがお市・市街地

「何とか逃げ切ったあ・・・」

「逃げ切れたわけないでしょ。相手は国の役人だよ？」

「やっぱり、そんなに甘くないかあ」

二人は王立産業振興センターから400mほど離れた、街の中央部にあるファーストフード店で食事をとっている。本来ならもつと遠くに逃げなくてはならないだろうが、とりあえず巻いたことだしそんなに焦ってもしょうがないだろうということで小休憩をとりながら今後の作戦を立てようということこの店に入った。一応、外から見えない席をとるくらいの配慮はしたがどの程度効果があるのかは分からない。

壮は炭酸飲料をストローを噛みながらちびちび吸いつつ、右手の甲で汗を拭いた。出不精の自分が夏休みにこんな運動するとは思わなかった。とはいえ今、そんなことを言っている場合ではないのだが、

絵真はホルスターから銃を取り出して弾丸を詰めている。ほかの客たちはどうせエアガンか何かだろうと思っっているのか全く取り合わない。富士山も離れてなくては全貌が明らかにならないように今起こっていることが近くで起きすぎていてを越えすぎてそのことに気付かない。自分はニユースの住民ではないと錯覚してしまっているのだ。

「むしろこれから本番だよ・・・とりあえず現状確認するけど」

「いや、ちよつと待って。聞きたいことがある」

「何？そんなに時間ないよ」

「あのメガネ男何したの？銃弾が全然当たらなかったけど・・・」

「あ、あれ？あれは・・・超能力」

「超能力う？」

「なに不審そうな顔してんの？事実だよ。つかさ君、見たでしょ実際。」

「確かにそうだけど・・・」

正直信じがたい、というか信じたくないが実際自分は見てしまったし、信じるしかない。信じなければ死ぬ、ということだけはうつすらと理解できた。

「あのメガネ男は松岡洋右、常在型操作系能力者、ランクはA、能力は「気流操作」。ほら、銃の軌道変えたり、爆風をかき消したり、煙幕をかき消したり、あれは空間の気流を操って風を起こしてるからなの。」

「えーと・・良くわかんない単語がいっぱい出たけど、要は絶対に銃が効かないってこと？」

「うん、もちろん」

「なんてこった・・」

「あー、あとあいつの主な攻撃は銃じゃなくて竜巻だから。こんな人がいっぱいいるとここではさすがにやらないだろうけど、食らったら即死っていうか吹き飛ばよ」

「対抗手段は？」

「ない」

「どうするの？」

「私たちだけでなんとかなるわけないでしょ？だから今、応援呼んでるの」

「笹村さんの仲間？」

「仲間というか上司」

「頼りになる？」

「もちろん」

「それはよかった」

「なに？私がそんなに頼りないっていうの？」

「正直、さっきの銃だってよけられたのは運だし。普通は蜂の巣だよ」

「心外。わかった、見せてあげるよ私の実力。つかさ君、小銭出して」

「何に使うの？」

「いいから」

「壮はポケットから財布を取り出しその中から一番サイズの大きい貨幣をつまんで財布を再びポケットにしまう。」

「うん、これどうすんの？」

「それをどっちかの手に隠して。当てるから。」

「？」

「なんだかよくわからないが、多分どっちかにコインが入っているかを当てることは確かだ。察しのいい壮は「この人も能力者なんだな」と気付いたが黙って手を後ろに回し、どちらかの手に小銭を移動させる。」

「はい、どうぞ」

「こっち」

「絵真は片方の手を指差す。その手がゆっくりと開かれると何も入っていないかった。」

「あれ？外れだよ・・・」

「もう一回」

「もう一回、もう一回、と少女は片方の手を指差すが一向に当たらない。ついに16回連続で当たらなかった。」

「あ、あの、全然あたらないけど」

「つかさ君バカなの？16回連続で「故意に」外してるの。」

「え？・・・うわ・・・すごい。16回連続だから・・・」

「単純計算で65536分の1、ホントは違うけど」

「一体何やったの？運がいいようにしか見えないんだけど・・・」

「そう、これが私の能力「すさまじい幸運」よ！」

「さっきの銃弾もたまたまじゃなくて能力によって・・・ってこと？」

「そういうこと。大抵は私に都合のいいように能力が働くの。でも起こるのが0%の事は無理、こめかみに拳銃当てられてるのに発砲されても避けれるなんてことはないから。あくまでもありえるレベルで、ってこと」

「すごいなあ・・・」

「ダメだよ。私の目標はあくまでも「みんな」を幸せにすることだから。自分一人が降伏になつてるようじゃまだまだなんだから」

「十分すごいよ。これでメガネ男とも対抗できるんじゃない?」

「甘い、私の能力はあくまでも「幸運」に過ぎないんだから「願いをかなえる」じゃない。取り押さえられて絶対に銃がよけられない状況で銃をよけるのは無理なの、でなんとかするために応援を頼んでるんだけどあ・・・全然出ない・・・?・・・へ?」

「・・・どうしたの?」

「つかさ君、冷静に聞いて・・・」

「う、うん」

「・・・組織に見捨てられた」

「・・・マジ?」

「なんか一人で頑張れつて・・・」

「ど、どうするの? 対抗策とか」

「今、考えてる!」

「ご、ごめん」

だめなんじゃないか、と壮は直感で感じた。絵真は裏切られたことを知ってかなり動揺している。銃口を向けられているのに平然としていたことを考えるとかなり異様だ。それだけ自分の組織に依存していたからなのだろうが、それにしても先ほどまでであった妙な余裕がない。普通のパニックだった、ただの中学生だ。

「と、とりあえず店を出よ」

「やみくもに逃げてもしょうがないよ」

「う、うるさいなあ! 黙っててよ!」

だめだ、だめだ、だめだ。何も考えていない、怯えきつた眼。引きつった表情。どう考えてもこれでは助からない。はつきりとわかった。

「ちよ、ちよつと落ち着いてよ」

「君に何がわかるの!?? 今日来たばかりの素人でしょ!?? 黙って連

「いてこればいいの!!」

気づくと二人とも大声になっていて、客な彼らのほうを異様な目で見ていた、が痴話げんかか何かだろうと思っただけで誰も話には介入してこなかった。

「・・・確かにそうだけど」

「分かったんなら店を出るから早くして!」

「でもさ」

「何?!はつきりしてよ!」

「とりあえず怒っても解決しないよ」

「うるさい!怒ってない!私に指図するな!!」

「しつかりしてよ!!!!」

「!!」

強烈に大きい声が店内に響く。客はもちろん、絵真も怯んだ。

「連いてくよ!ああ連いて行くよ。どうせ俺には何もできやしないでもさ、僕が笹村さんについて行くのは助かりそうだからだ!焦って助かる可能性を捨てるような人に連いてく気はない!誤った判断に身を任せるなんて御免だ!そんなのは自分で歩くことも知らないバカがやることだ!」

「じゃあ」

「?」

「・・・どうしろっていの?」

絵真は顔を下に向けてしまった。「うわ、泣かせちゃった」と一瞬反省する壮だったが何を血迷ったかいきなり絵馬の胸ぐらをつかんで思いつきり平手打ちした。パシン!という音が店内に響く。

「ふ、ふえ?」

絵真は口を開けて茫然としている。涙が少女の頬を濡らしていたが眼から流れている涙自体はもう止まったよう、少しづつ乾き始めている。どうやらいきなり殴られたためいろんな感情を引き出す以前にまずびっくりして声もでないらしい。ここまでポカンとされると逆に罪悪感がぶり返してきてやりきれなくなった。

「あ、あの、殴ってごめん。で、でもっ、今はそんな事態じゃないっていうか、そのっ」

「いたい」

「ご、ごめんなさい」

「ありがとう、目が覚めた」

少女は強い表情に戻っていた。

「じゃあ、これから生き残る作戦を考えよう」

「もしかして説得するだけして私に丸投げってことはないよね」

「うーん、一応考えたんだけど。まずどうしたら助かる？」

「それを今、考えてるんでしょ」

「「結果」だよ。笹村さんが考えてるのは「結果」じゃなくて「過程」だ。まず最終的なビジョンを求めたうえでそこから作戦を練っていくのは重要なことだよ。要はどうなったら生き残れる？」

「あいつらを返り討ちにする・・・とか」

「そうだ、それ。それを成功させるためにどうするかだ」

「ムリに決まってるでしょ？」

「なんで？」

「何でって、相手はAランク能力者だよ!？」

「少し凄さがわからない」

「人々能力を持たない者が「重火器を持たばなんとか対抗できるレベル」がBランク、あいつはその二段階上、「一個中隊と対抗できるレベル」のAランクだよ!物理的に無理!」

「笹村さんも能力者だろ？」

「私は国に属してないからランクはわかんないけどせいぜいC+からC、もしかしたらDランクくらいかもしれない、そんなに有用性のない能力なの。そもそも人数だって相手の方が多いし、話にならないよ・・・」

「・・・と、敵も思ってるはずだ」

「!」

「あれぐらいならそんなに苦労しない・・・って思ってるはずだ。」



そもそも君が能力者であることもバレてないはずだ。運がいいようにしか見えない。だから僕らはただの子供だと思われてる。銃の弾も撃ち尽くしてるしね」

「待って、銃弾はまだあるよ！」

「ということはまだ、こつちにもチャンスがあると思うんだ。多分増援も呼ばない。そして、敵はきっと全員一人行動であたりを広く探し回っている・・・はずだ。それを一人一人叩いていけばいい。銃弾はあと何発残ってる？」

「10、いや11発ある。」

「敵は五人だ。慎重に使おう。無駄撃ちしないで」

「わかってる」

「それとき、国の役人っていうけどあの人は厳密にはどういう役職の人なの？」

「ああ、あの松岡っていうメガネ男は王立「神」親衛隊っていう組織のメンバーで他の人はその下請けみたいなのこの人だと思う」

「警察とか呼べたりする？」

「思いつきり暗部組織だったと思うけど・・・」

「よかった、それなら応援とか呼ばれたりしないな。ほら、可能性見えてきたじゃん」

「結構気楽なのね・・・」

「実際に実行するのは9割笹村さんだ。俺はただの役立たずすぎない。実際に銃の引き金を引くわけでもないし特別な力もない。むしろ、そっちの方が物事を客観的に見えるような気がするんだ。」

「そう・・・そうだ、結局は私が何とかしなきゃ・・・頑張るか」

「OK、じゃあ行こうか？」

「あ、あのさ。つかさ君？」

「何？」

「あ、ありがとう・・・」

「・・・俺は死にたくないだけだよ」

壮は炭酸飲料を飲み干し、二人は席を立つ。トレイを片付けて、店のドアを開ける。湿った熱気が顔を撫でた。途端に汗が吹き出してきて体をじつとりと濡らす。

「とりあえず頑張ろう。幸いこっちは攻撃を待てる」

「カッコつけすぎ」

「ごめん」

「でも・・・ちょっと格好いいよ」

「ありがとう・・・じゃあ行こうか」

「あ、ちよつと待って。靴ヒモ結ぶから」

そう言つて絵真が屈むと頭上をちよつと何かが通り過ぎた。

銃弾だった。

運がいいのか分からないが周りの人々は全く気付いていない。ただ何事もなく各々の道に向かつて歩いている。異変に気づかぬまま。

「どこから!？」

「多分、ビル」

「ビルつて・・・周りに凄く高いのしかないよ。あんなところから他の人もいるのに笹村さんだけを正確に撃つなんてできるの？」

「松岡の能力だと思う。気流をコントロールして銃弾を正確に誘導してるんだよ。」

「そんなことまで、できるのか・・・」

「相手は「一個中隊と対抗できるレベル」だよ。それぐらいできて当たり前。問題は・・・私たちの居場所がバレてることだよ!」

「とりあえずこの場から離れよう!」

「動いたら撃たれるよ!？」

「気流を操つてるといっても動いてたら十分当てにくいはずだ、運に身を任せよう!」

「何そのテキスト加減!？」

「いいから!」

壮は強引に絵真の手を引っ張る。今日起こった一連の事件で学んだことは「躊躇したら死ぬ」ということだけだった。しかしそれがわ

かった時に少年は「常識」という拘束から抜け出せてだいぶ心に余裕が持っていた。

「ちよつ、引つ張らなくてもいいでしょ？」

急いで路地裏に逃げ込むと案の定、黒服が立っていた。壮の予想通り一人だった。

「あれも能力者？」

「多分」

「そうかー・・・じゃ、頑張つて。俺も死なない程度に頑張るから」「それは心に余裕を持つてつてことなのか、ただ単に無責任なのかどつちなのか？」

「受け取り方は人次第だよ。答えが一つとも限らないし」

「わかつたわ、・・・じゃあ、どいてて」

「了解」

絵真はホルスターから銃を取り出して、安全装置を引く。ビルの谷間に風が流れた。

## 1 - 2 「対 瞬間移動能力者」

七、7月21日午後1時37分 ひるがお市・路地裏

絵真と黒服は10mほどの間隔をあけたまま睨みあっていた。絵真は銃を構えたままだが黒服は丸腰。

「（と、なると、こちらをナメてる。銃を持っていないと思ってる、は確定。適当に間合いを詰めて殴りかかってくるつもりだろう。笹村さんが躊躇しなければ銃一発でイチコロ。問題は何の能力者か。つてことだけど・・・）」

壮は工事の材料が積まれたところに隠れてその間から笹村の戦いを眺めていた。右手には鉄パイプ、左手には150cmほどの鉄板が握られている。一人の少女に戦いを任せるのは心もとないが、今、自分が飛び出しても何の役にも立たない。それよりも今自分のすべきことは後続の黒服に戦いを邪魔させないことだ。1対1でも心配なのに、それが2対1になったらかなり絶望的だ。それだけは避けたい。だから物陰に隠れて不意打ちの機会をうかがっているのだが、ほかの黒服達の来る気配が一向にない。ただし、銃弾なら来ている。

壮は鉄板でそれを防ぐ。弾が来る直前に独特の風切り音がするので簡単にわかった。幸い鉄板は二枚重ねしてあったし、一枚目は貫通しても二枚目でなんとか食い止められた。

松岡が気流を操って弾丸の軌道ををねじ曲げているのだろう。しかし、弾丸が笹村の方へ行かないということは不可視部分へ弾を誘導することに關して精密さがそこまでなく、黒服に当たる危険を避けるためにこちらにはばかり発砲してくるのだろう。

「（さすがにそこまでだったらピストル一本で世界の誰でも暗殺できるもんな、とりあえずこっちは大丈夫だろう。笹村さん大丈夫かな?）」

壮は絵真のほうを見たがさつきと全く変わっていない。非常にまずい。他の黒服が応援に来たらアウトだ。自分が備えているとはいえず手持ちは鉄パイプ一本だ。敵は銃を持っているしもつと強力な武器を使ってくるかもしれない。だから黒服にとってこの妙な間合いはラッキー、そもそも向こうは絵真の拳銃に銃弾が入っていると思っ  
てはいないだろうが、念には念を、どうせただ待っているだけで勝てるのだ。圧倒的有利。

「（どうする？どうする？どうする？）」

そう思っていると絵真はホルスターから素早く銃を取り出し銃の引き金を引いた。取り出すのが早すぎてまたもや水色の何かがおもしろい  
つきり見えたがその直後風切り音が来たので一瞬しか見えなかった。銃弾は眼で捉えられないスピードで黒服のほうへ向かって言ったが、銃が到達するころには、そこに黒服の姿はなかった。

「消えた!？」

と絵真が感じて数秒もかからず眼の前に黒服が現れた。「銃を構えよう」という思考が働いたころには地面に叩きつけられていた。慌てて受け身をとった少女の目の前には体格のいい黒服が立っていた。慌てて銃を撃ったが黒服はまたもや消えて、気付くとさつきと同じ場所にいた。

「ほう？銃を持っていたんだな」

「瞬間移動能力者？」  
テレポーター

笹村絵真は動じない。ただこの男を倒すことだけに全神経を張り巡らせていた。

「そうだ」

「（喋った!?)・・・さつき札束移動させたのもあなただったこと？」

「そういうことだ」

くだらない質問をしている間に絵真は策謀を張り巡らせる。相手は瞬間移動能力者、札束を動かせたことから物質・人間を問わず。いや、そうしたら二人が逃げたときに能力を使って瞬時に自分達を追

えはよかったのだから自分を含め人間（質量の大きなものかもしれない）は動かせないか、もしくは特殊な手筈が必要。と、なると乱発できるものじゃないはずだ。少しずつ攻めていけば銃を使って倒せる。とは思うのだが、残る銃は9発、松岡に3発使う勘定で行くともう1発も使えない。勿論そんなことも言っていられないが、今後のことを考えると銃を乱発することはできない。

「（慎重にならないと・・・）」  
銃を構える。男はそこに突っ立ったままだ。とりあえず彼をどうやって倒すかだ。

そもそもレポーターというのは1対1での戦いではAランクを凌駕するほどの実力を持つ能力者のハズだ。驚異的な移動能力、これで回避と移動をいっぺんにこなせる。そして、他の能力とは全く違う攻撃方法、彼らは物質を特定の座標に移動させることができる。例えばそこに転がっている鉄くぎを人の頭の中に移動させたとする。すると鉄くぎは脳を押しつけてそこに出現する、結果的には脳を破壊することになる。という防御不能の攻撃方法。この二つがあればほとんどの人間を倒すことができる。それこそただ運のいいだけの自分など瞬殺されていいはずだ。なのに、それをしてこない。ということは・・・

「（能力の発動に限定条件がある。それも1つじゃない）」  
まずそれを発見することだ。いくら相手が大男だといってもこちらは拳銃を持っているのだ。一発ぶち抜けば致命傷。弱点を発見すれば勝てない相手ではない。

「つかさ君！銃撃止まった？」  
壮は相変わらず材料置き場の影に隠れていたが、絵真の位置姿から見えるし銃弾が通る余裕もありそうなので隠れている意味は実質なかった。

「多分、止まったよ！」  
依然として後続が来ないか心配している少年のけなげな様子に少し感動した絵真だったがそんなことはどうだっていい。

「（ということとは既に松岡はビルから移動して、最悪こつちに向かっているってこと・・・早く決着つけなきゃ）・・・つかさ君！鉄パイプ1本・・・いや2本貸して！」

「了解！」

壮は積み上げてある鉄パイプを二つとって絵真のほうへ転がす。絵真は銃をホルスターにしまつて鉄パイプを手に取る。

「ふっふっふ、鉄パイプ二刀流」

「それでどうする気だ」

黒服は胸ポケットから銃を取り出していた。安全装置を引いてそのまま発砲する。しかし銃弾は鉄パイプに当たつて軌道をそらし路地裏の壁に当たつて砕け散つた。絵真は不敵な笑みを浮かべている。黒服は少しびっくりした様子だ。

「銃？やめといた方がいいと思う。私には当たらないよ」

「な、何の能力だ！？」

「運」

話にならないと思つたのだろうか黒服はもう一度発砲したがやはり鉄パイプに当たつてあらぬ方向へ反射した。絶妙な角度で当たつたのか、鉄パイプは少しへこんだ程度でまったく影響がない。

「だからあ、その距離からの銃は効かないの、いい加減気付いたら？」

「なら、・・・実際に殴ればいいだけだ」

男は消える。すると間もなく絵真の目の前に現れる。いや、厳密にはさっきまで絵真のいた位置の前、だ。現在の絵真はその真後ろにいた。

「ビンゴだね。あなたの能力には消えてから現れるまでに多少のタイムラグがあった。消えてから現れる座標を決めるのか、現れる座標を決めてから消えるのか良くわかんなかったけど、たぶん私に後ろとられたつてことはおそらく後者。どう、あつてる？」

「分かつたからなんだつて言うんだ？能力を使わなきゃいい話だ。」

「今、私の手には銃が握られている。」

絵真は手に持った金属の塊の先端を黒服の背中に押し付ける。銃なんかではない。ただの鉄パイプだ。しかし絵真の真後ろの黒服にはそれが見えない。

「！……いや、嘘だな。さっきまで鉄パイプ握ってたのに俺の背後に回って音もなく鉄パイプを下し、銃を構えるなんて芸当は不可能だ。」

「でもそれを証明する証拠は足りない。なぜならあなたは今、私を見ていない。そしてもし、私の言っていることが事実だった場合、あなたは死ぬ。」

「チツ」

「どうするの？死にたくなかったら能力使えば？」

「……調子に乗るなよ！」

黒服が消える。「別に銃なんか構えてなかったのに」絵真はにやりと笑い持っていた鉄パイプを真横に移動させた。少々のタイムラグを置いて彼は絵真の真横に現れる。そして絵真は、一瞬のタイムラグの間に持っていた鉄パイプを黒服の出現する位置に移動させていた。黒服と鉄パイプ、二つの位置が重なっている。つまり、

黒服の肩が鉄パイプに貫かれていた。

「うぐっ……」

悲痛な声を漏らす黒服の肩に生えた鉄パイプを絵真は躊躇せず引き抜き、もう一方の鉄パイプで黒服の胸を思い切り殴った。黒服は痛みでのたうち回る。

「これで一人は片付けた……」

絵真は乱れた息を整える

「どうやって俺の出現位置を割り出した？」

黒服は肩のあたりを抑えてへたり込んでいる。傷口からは赤黒い液体が流れ出ていた。

「ああ、私ものすごく運がいいんだよ。つかさ君、行こ」

「……ああ、はい」

さっきまでの壮絶な戦いを茫然と眺めていた壮は、はっと我に返り、



小走りで絵馬の横にたどり着く。二人は歩きだした。

「やっと一人、残り四人だよ」

「流石だよ・・・この調子で生き残ろう」

「甘い、あいつはたぶんD\Eランク、話にならない」

「そうか・・・でも頑張る！」

「うん」

壮が絵真の息が整うのを待つて歩いて後ろで「待て！」という声が出た。やられた黒服だ。傷口を抑えながら何とか立ち上がった。サングラスは割れている。

「まだ終わっちゃいない！」

「しつこいなあ、何度やつても同じだよ。私さっき「運」って言ったけどある程度までは計算できてたんだからね。あなたの能力は「止まっていて・近い場所にある・見えている」物を、指定した「見えている」座標に少し時間をおいて移動させる」っていう、限定条件だらけのザコ能力。きつとあの状況なら、「私の目の前に反転して」現れるか「角度的に一番遠い範囲」、人間の視覚は約210度だからちよつど私の真横あたり、に移動する。2分の1の確率で私は後者を選んだ結果、当たったってだけ。自分の手の内がバレてちゃ勝てるものも勝てないよ」

壮は「あの状況でそこまで計算していたのか」と感心している。が、黒服は笑みを浮かべていた。

「何？やるの？」

「なあ、お前らが運んでくるはずだった「麻薬」って何のことかわかるか？」

「いきなり何？」

「ああ、しらねえようだから教えとくよ。あれは厳密には麻薬じゃない。」

「そんなこと知ってるよ」

「みんなそこまでは知ってる。だったら何なのかわかるか？」

「・・・知らない」

「だろうなあ、一部の人間しか知らない」

「そんなこと今は関係ないでしょ？・・・これ以上抵抗すると撃つよ？」

絵真は銃を構えた。なおも黒服は続ける。

「Ether<sup>エーテル</sup>って代物だ。麻薬って言ったら白い粉を創造しそうだがこれは液体・・・ほら」

黒服は服の内ポケットをガサゴソやって手のひらに収まる程度の小瓶を取り出す。中には青白く輝く液体が入っていた。何からできているのか想像もできない。

「なんだかしらねえが、これを飲むとよオ、能力者は能力が強化されるんだ。俺の場合、ざっと2ランク分、2ランク分、俺の能力は進化するんだ。お前が言ったとおり俺のランクはE、能力は限定条件だらけのザコだ。でも2ランクも上がったらどうなると思う？」

「ありえない」

「わかってんだろ？おまえの目の前で起こっていることはすべて事実だ。」

男は小瓶の蓋を取り、中に入った青白い液体をすべて飲み干して、息をついた。

「ま、信じなくてもいいさ、これから実際に起こることだ」

銃声。絵真の構えた銃からだった。しかし銃弾の通過した点にはもう既に黒服はいない

「おいおい、いきなりかよ。さすがに驚いたぜ、え？」

後ろから声が聞こえ、振り返ると黒服がいた。黒服は傷口を破ったシャツで巻いて止血している。どうしてたった1、2秒のタイムラグでそんな動作に移れるんだ？と壮はびっくりしたが絵真が「つかさ君、下がってて、」と言ったのでまた物陰に隠れる。

止血を終えた黒服はサングラスを外して不気味の微笑む。

「ま、賢い選択だな。能力を発動する前に息の根を止める。とつても賢い作戦だったが、失敗しちまったなあ」

絵真は銃を構える。腕が細かく震えていて、明らかに力が入ってい

るのがわかった

「さあて、これからが本番だ・・・」  
黒服は消えた。

## 1 - 2 - 2 「対 瞬間移動能力者 其の2」

八、7月21日午後1時41分 ひるがお市・路地裏（厳密には工事の材料置き場）

笹村絵真は正直、勝利に酔っていた部分があった。

これまで自分にまかせられていた仕事とさえればそれこそ誰にでもできるようなことばかり。自分の夢を自分でかなえている感覚はなかった。だからこそ自分ひとりの力で勝つことができたのは大きなことだった。油断していたかと言えばそうではない。しかし、自分の生きている本当の意味で何が起こっても何の不思議もないこの世界に対して自分に付け入るすきを与えていたのは確かだ。

詰まる所、「この世界をナメていた」

しかしそんな甘い幻想は直ぐに打ち砕かれる。

絵真の横腹に太い拳が入った。次の瞬間、鈍い痛みが殴られた部分から全身に響く。そのまま路地裏の壁に叩きつけられる。痛みを必死にこらえながら自分がさっきまでたっていた場所に立つ黒服に向かつて発砲するがもうそこに姿はなく、自分の前に現れ次の瞬間脇腹を強烈な蹴りが襲う。またもや壁に打ちつけられて、頭痛とともに全身に痛みが響く。意識が朦朧としていた。口が切れたようだがそんなことは大きな問題ではない。もうボロボロだった。

わかったことは「瞬間移動能力者は強い」ことだ。圧倒的すぎる。

どうやら座標選択のタイミングが変わったらしく、もう鉄パイプ作戦は使えない。銃を構えれば構えた瞬間に銃の当たらないところに移動して攻撃を食らう。どう考えても勝てる要因が見えてこない。

「（調子に乗り過ぎちゃた・・・かな？）」

「もういい」とでもいうように壁にへたり込む。このままなぶり殺しにされるのか。「いやだな」、もちろん嫌だったがこうなったからにはしょうがない。誰かから殺される場合には相手から殺される

ことを考慮しなくてはならないのだ。

激痛。黒服は倒れこんだ自分をなおも忌々しそうに蹴っている。一発一発ごとに意識を保つのが少しずつつらくなってきた。

「（もう・・・だめだ）」

眼の前がすべて真っ白になって、笹村絵真の意識は飛んだ。

八、7月21日午後1時41分　ひるがお市・路地裏（厳密には工事の材料置き場）

式場壮はただただおびえていた。

さっきまで笑顔だった少女の顔が苦痛に歪んでいる。一発一発と拳が少女を襲いそのたびに彼女の命が削ぎ取られるように力がなくなっていく。それでもあの黒服の男は絵真を殴り続けるのだ。何度も、何度も・・・

黒服は許せなかった。しかしもつと許せないのは自分だった。あの子がどれだけ傷つこうとも一歩も動けない。足は震えて、鉄パイプを持つ手はひどく汗ばんでいる。

思えば命の危機に瀕するのは二回目だったが実際に傷ついたわけではなかった。自分は骨が折れたわけでもねんざしたわけでもない。かすり傷一つ負ってはいない。しかし、今、彼女は実際に殴られ傷っている。なのに自分は何にもできない。

怖い、怖い・・・怖い、怖い

ついに少女は壁にへたり込んでしまった。しかし、なおも黒服は彼女をその太い足で蹴り続ける。そのたび少女は更にぐったりしていく。

助けたい。助けたいが、今自分が出て行っても何ができる。結局殴られるだけだ。殴られて何になる。絶対傷つきたくない。誰だつて自分の身の安全が大切なのだ。卑怯なのはわかっている。卑怯だつてわかっているてもできないことがある。そもそも「卑怯」なんてものは勇者が傍観者を蔑むときに使う言葉だ。自分はしよせん傍観者

だ。使われる筋合いはない。絵真はついに気を失ってしまった。もういつそのこと命乞いでもしようか。もしかしたら助かるかもしれないし、生きるためなら気高くいる必要はない。そう思うと心が楽になった。

絵真を散々蹴ってついに気絶させた黒服はつまらない顔をして、そして

「ガキが、イライラさせやがって！」

と言ってもう一度、蹴り上げ、絵真の顔につばを吐きかけた。つばはぐったりした絵真の顔にべたりとついて垂れる。壮の眼にその姿がはつきりと焼きついた。

その瞬間、壮の何かが切れた。

「オマエ、なにやってんだ？」

気付くと立ち上がって、黒服の方へ歩み寄っている。自分でも何をやっているか全く分からない。怖い。確かに怖い。ただ、ここで怯えていては自分がだめになってしまうような気がした。何か自分の中の絶対的なものが崩壊して、奥底にある細く、強靱な糸のような「心」が自分を引っ張っている。そんな感じだ。多分、自分は怒らなくてはならないんだ。という脅迫観念に近いものが今の壮を突き動かしていた。

「どうしたんだ？そこで怯えていたんじゃないのか？」

黒服に慌てた様子はない。せいぜい勇ましいバ力を見ているような感じだ。

「質問に対して質問で答えるな。何やったんだって、聞いてるんです」

「ガキの始末」

「そういうことじゃないんですよ！あんたさっきまで何やってた！？」

「ああ、あれか？こんなかわい女の子をそんなボコボコにしていけませんってか？わざわざそんなことを言いに来てくれるとは勇敢な男の子だ。そもそも俺はこいつに殺されかけたんだ。貫通位置が

あと十数センチずれてたら死んでた。自業自得だ。」

黒服は自分の肩の傷口を抑えながら不愉快そうに言う。それが壮の怒りをさらに増長させた。鉄パイプを強く握る。

「謝罪してください」

「あ？」

「彼女に謝罪しろって言ったんですよ！」

普段はありえない自分の怒りの部分が自分を追ってくる。言葉に激しい感情が現れえてくる。棘棘しい、怒りの感情が・・・

「さっきまでそこで震えてたやつが大層なこと言うねえ」

「さっきの俺と今のおれは違います」

「何が違うんだ？」

返答はない。壮は黒服をじっと見つめていた。その眼に映るのは激しい怒り。

「ああ、そう・・・残念ながら答えはNOだ。自分を殺しに来た奴に何で謝罪するんだよ？バカか？そもそもお前らは国にとって敵だろ？国家反逆者は制裁されて当然なんだよ！！俺は国のために正しいことをやった！おれの方が正しいんだ！！」

「ちっぽけな思想ですね」

「なんだと!？」

「ちっぽけですよ！国のため国のためって、それはあなたの思想なんかじゃない！他者の考えでしか正当性を見出せない、ちっぽけな人間ですよあなたは！」

「それがこの国だ。この国は「神」の意思で動いている。そのルールから外れる奴は排除される。それだけのことだ。おまえらに正当性なんかない」

「そんなこと話してないでしょ・・・!」

「何？」

「正当性とかそういうことじゃなくて、あなたにはこの女の子を国のルール云々じゃなく「ひとりの人間」として思いやってやる気兼ねもないんですか!?!？」

「ないね」

「なら・・・いいです。・・・あなたを倒します」

「彼は鉄パイプをさらに強く握り、構えた。」

「倒す？殺すって言葉も使えない臆病者に俺が殺せるのか!？」

「言葉だけ強くても仕方ないでしょう」

「鉄パイプを構える姿を黒服は鼻で笑う。」

「謝らないからって殺すのは野蛮な考え方だな」

「じゃあ、謝ってください」

「いやだ」

「なら殺す」

「彼の目つきが変わった。もう、怒りでもない。暗く、冷たい殺意。」

「そんなことできるのか？体格差を考えてみる。リトルリーグとメジャーリーグだ」

「勝てるか勝てないかじゃない。自分の意志を通せるかどうか・・・だ」

「精神主義は嫌いだ」

「そんな大層な物じゃない」

「まあいい、殺そうとしてるんだから、殺される覚悟も持ってるんだろうな？」

「勝てると思ってるのか？」

「何言ってる？それはこっちのセリフだ！ただの中坊が俺に勝てるのか!？」

「俺は確かにただの中学生だし銃も持ってない。でもおまえは手負いだ。倒せるのは何の抵抗もできない女の子だけ・・・鉄パイプで殴り続けたらどうなる？」

「確かに俺の飼うではもう機能しない。普通の人間だったら勝てないだろうな。でも、それは俺がただの人間だったらの話だろ？俺は能力者だ！しかも貧弱な能力じゃねえ、俺の能力は瞬間移動！1対1ならどんな敵にも対応できるこの状況で最強の力だ!！」

「知るかそんなもん」



壮の顔が思いのほか真剣になったが黒服は取り合わない。

「知るかそんなもんじゃねえ！おまえはこれからそれを体験すんだよ。ほら！！・・・・・・何だ？」

黒服は瞬間移動しようとしたのだからなぜか失敗に終わったようだ。

「そつちが来ないなら、こつちから行くぞ」

「何でだ？何で能力が発動しない！？」

びっくりしている黒服をを無視して、壮は何の躊躇もせず鉄パイプで、黒服の顎を思い切り叩き割る。骨の碎ける音がして、顎を叩き潰した鉄パイプは変な方向にへしゃげたが壮はそんなことに気付かない。そんな余裕はない。黒服の顔が本気になった。

「何してんだ teme !!」

声を荒げる。表情からは余裕が消えていて、怒りと驚きで満ちている。そして殴られたことよりも、むしろ能力が働かなかったことにびっくりしているようだ。

「うるせえ エエ！！！！」

壮は鉄パイプを振りかぶる。表情には殺意しか見られない。黒服は壮の背後に回り込もうと能力を起動させる。しかし、体が移動しない。移動したのは・・・

壮の後ろで「ボトリ」という音がした。彼の後ろには黒服の右腕が転がっていて、当然ながら黒服の右腕は根元からなくなっていた。

が、そんなことを気にするほど壮の意識は正常ではない。鉄パイプを思い切り眉間に叩きつける。鈍い音がして黒服の額が割れた。鉄パイプは根元からへし折れる。壮は絵真の近くに転がっている、血まみれの黒服の体を貫いた鉄パイプを素早く手に取る。黒服は思わず眉間を押さえた。もちろん血が出ている。意識が朦朧としてきた。黒服は体を鍛えていたが、頭部というのはそんなに鍛えようがない部分のだ。頭痛が響く。黒服はこの見知らぬ中学生にここまで追い詰められてかなり焦っていた。そんなはずはない。こんなはずではない・・・

「右腕だけ、テレポートした。・・・能力が、正常に・・・働かない。何故だ!？」

能力が正常に働かない。さっきまでこの力で少女を圧倒していたはずだ。最初は運よく逃げていた少女もこの力にかかつては駄目だった。ほんの数分で黒服のペースになった。この状況では文句なしに最強の能力のハズだ。なのに、その力がうまく発動できない。

「何故だ?なぜだ?何故なんだあああ!??？」

「そんなこと知るかアアアア!!!」

黒服は、自分がおびえていることに気付いた。「死にたくない」、もうろうつとした意識の中でその言葉だけが心の中に反響していた。オロオロする黒服の反応など全く気にしない壮は鉄パイプをこれでもかというくらい振りかぶる。頭の中はこの血まみれの男を殺すことしか考えていなかった。

「地獄で詫びろオオオオ!!!」

怖い、死にたくない。そんなギリギリの状況に立たされた黒服は必死の思いで無理やり能力を起動させる。死にたくない、死にたくない、死にたくない!

鉄パイプが黒服の頭に思いツツ切りぶち当たった。

いや、厳密にはぶち当るはずだった。だ。鉄パイプは大きく空を切り、「ガツン」という音を床に響かせる。

すぐに我に返った壮は辺りを見渡して黒服の位置を確認する。

・・・いない、どこにも。一体どこに行ったんだ?

キョロキョロ動きまわっている壮の足が何かにぶつかった。なんだろうと思つて下を見る。と、思わずぎよつとした。

黒服の生首だった。

首だけではない右腕、右足、胴、左腕、左足・・・全部で6パーツのバラバラになった黒服の死体。いずれものぞいた肉から血が垂れている。到るところに返り血がついて辺りは壮絶なことになっていた。

なぜテレポートに失敗したのだろうか?さっき飲んでいた薬の副作用

用だったのかもしれない。ああいう薬には得てして副作用があるものだ。

壮は神妙な顔で黒服の生首を眺めた。表情は口では言い表せない悲愴に満ちており、口は微妙に開いていて、まるで何か言いたげだった。

そのうち、自分の手にも黒服の血が付いていることに気付いてとても嫌な気分になった。

妙だ。不完全燃焼したような、焦げ付いた、なんだかよくわからない感情。心の隅にはまだ燃えカスが残っていたがそれをどこにぶつけたらいいのかよくわからなかった。

「おい！いたぞ！」

振りかえると別の黒服がいる。しかも二人だ。こんなタイミングで来るのかと、「神」を恨んだが、ちょうどいい。このなんだかよくわからない鬱陶しいもやもやを吹き飛ばせそうだ。

「もう一人やられたらしい。応援頼む！」

黒服が作戦だの能力だの何やら話しているがそんなものはもう耳に入らない。

式場壮は血まみれの鉄パイプを掴み、黒服達のほうへ走りだした。

1 - 3 「誰が殺したのか」

九、7月21日午後3時1分 ひるがお市・路地裏

笹村絵真が目を覚ますと、目の前には悪夢が広がっていた。

血まみれの黒服が三人、そのうち一人は体がばらばらになって地面に転がっており、そのうち一人は皮膚や顔がただれており、そのうち一人は体中が焼け焦げていて所々、肉が見え隠れしている。

絵真は吐き気をこらえ少年を探した。立ち上がると体に痛みが走って自分の体がぼろぼろになっていることに気付く。

少年は工事の材料置き場の影に数本の細い鉄パイプの下敷きになって倒れていた。真っ白の制服は返り血を浴び過ぎて元の面影がほとんどない。

本当はそつとしてやりたかったが緊急事態だ。ぐいぐい押してたたき起こす。しばらくすると少年は朝起きるようになんどもさそうに起き上がる。

「・・・つかさ君、大丈夫？」

「ああ、うん。大丈夫、」

起きあがった少年を良く見ると服の所々が焼き焦げていて肌が見えている。

「あ、あのさ、つかさ君？質問していいかな？」

「ああ、いいけど急いでね。もう結構時間が経ってる。」

「これ、あなたがやったの？」

眼の前には惨劇が広がっている。この血の海の元凶がこの軟弱そうな少年であると絵真はどうも考えられなかった。

「違う。あのバラバラの死体と戦ってた時はともかく、残りの二人相手に、僕はただ殴られていただけだ。」

「じゃ、だれがやったの？」

「自滅したんだよ。」

「自滅？」

信じられない。黒服達は能力の代償こそあれ戦いのプロのハズだ。そんな人間が自分の能力で自滅したりするのだろうか。

「その瞬間移動能力者は瞬間移動のときに体がばらばらになっただらしい。その皮膚がとけてる人は自分の起こした日に巻き込まれて、そのの焼き焦げた人は・・・たぶん電流が逆流したんだと思う。最初、手の周りがバチバチ光ってた」

「ふーん、なんで？」

「どうもさ、瞬間移動の黒服が取りだした青白い液体、あれが原因だと思っただよ。能力を強化するって言ってたし・・・ということ は副作用とかでさ・・・」

「まあ、一理あるけど・・・」

確かに一理はあるのだ。能力が強化された結果、それを制御できずに暴走させ、自滅する。一応、理屈は通っている。しかし、本当にそうだろうか。黒服達は裏の人間だ。彼らの目的は社会に見せられないものを内々に処理すること。能力等の裏の情報を表に出さないように尽力している連中が、能力を暴走させ一般人に気付かれるような危険を冒し手まで強い能力を手に入れようとするかは疑問だ。しかも自分たちのような中学生に。最初の黒服は追い詰められていたからうなずけるが、壮の証言通りなら他の黒服も薬を服用したということだ。どうもそんな風には考えられない。ということは他の要因があるはずだ。

「つかさ君、黒服が自滅してた時、君は何してた？」

「？、そんなこと聞いてどうするの？」

「いいから」

「一人目のときはキレてたから何も覚えてないけど、気付いたらバラバラになって倒れてた。二、三人目のときは、最初のうちは向こうも能力が使えてたみたいなんだけど、俺を的にしてゲームをし始めたあたりで能力の調子が「変」って言い出した。」

「ふーん（キレてた、ねえ・・・）。あのさ、そのゲームし始めた

あたりの状況を詳しく説明して」

絵真の思惑をまるで何も飲み込めていない壮はとりあえずよくわからない顔で話し始める。

「えーと、気付いたら黒服がばらばらになってて、どれで他の黒服が後続に来てたんだけど、俺、キレてたから鉄パイプ持って突っ込んだら案の定ぼこぼこにされて、そしたら黒服の一人が「ゲームをしよう、あのガキを能力を使って殺せば勝ちだ」って言い出したから必死に逃げて、それから何初か攻撃を食らった後に転んじゃって黒服が「一発ずつ当てて行こう。ちょうど殺したら勝ちだ」とか言い出したあたりから能力の調子がおかしいって言い出して黒服の体に火がついてそいつは体がドロドロ。ここらへんでだいぶ意識が朦朧としてきたんだけど電気使いの方も結局自滅」

「私が寝てる間に結構壮絶な目にあってたんだね・・・」

「まあ必死だったからあんまり記憶がないけど」

「ふーん・・・」

絵真は状況を整理してみることにした。まず自分が気を失っている間に壮は三人の能力者と戦った。一人目は瞬間移動能力者、彼は体がばらばらになっている。二人目は発火能力者パイロキネシス体全体が焼けたたれており、おそらく体の内部器官も同様に溶けていると考えられる。

三人目は電流操作。体のあちこちが黒く焼け焦げていて、内臓器官が破壊されたと考えられる。ただ二人目より圧倒的に外部の損傷が少ない。体の外への損傷は一人目、二人目と少しずつ少なくなっている。

つまり、能力の暴走はだんだん少なくなっていたのではないかと考えられる。

そしてそれは、式場壮の意識が朦朧としてきた時間とぴったりだ。つまり考えられることは一つ、

「（つかさ君が能力者ってことだね。）」

ということしか考えられなかった。自分たちがテロリストで見方からも裏切られたことを考える限り、ほかの誰かが助けてくれたとい

うのはあり得ない。

「（私の幸運の能力が暴走しないところを見るとどうやらいつも能力が発動するわけじゃない。一人目のときはキレてた。に、三人目のときは「死にたくない」という感情が働いていた。と、なると結論は「感情に比例して他の能力を暴走させる」ってとこかな？）」「そんなところだろう。と絵真は結論をまとめる。とりあえず現段階では彼の能力にも頼る必要があるのだが壮に教えるのはやめておくことにした。壮の能力は分類上「起動型」というカテゴリーに当てはまる。ある一定の条件に当てはまることで能力が強制発動されるという不安定な能力のようだし、それを彼に教えてもし能力に支障があつたらこの先生き残れそうもないので教えないほうが賢明だろう。

絵真の長時間の思案を露程も知らない壮彼女が何やら考えているうちには黒服達の胸ポケットをガサゴソ漁っていたようで拳銃と青白い液体の入った小瓶を並べていろいろいじっていた。

「笹村さん。三丁あつたから二丁は俺がもらうけどいい？」

「この短時間で確実にたくましくなってるね・・・」

「あのお、笹村さん」

「何？」

壮は血まみれの制服を脱いでいるがそれでも血が点々とにじんでいる。その赤黒い液体は本当にその少年には似合わなかった。

「俺、あの黒服達を殺したんだよね？」

少年はなんだか悲しげな眼で絵真を見ている。そのはずだ、現にこちらを向いて自分としゃべっている思想であるはずだ。それでも絵真には彼がああ死体達を見ているとしか思えなかった。

「・・・能力が暴走したんでしょ？」

「確かに俺自身は殺してないよ。でもそれは殺せなかっただけで確実にあの人たちを殺そうとしてたし、結果的に彼らは死んだ。それって僕が殺したことになるんじゃないのかな？」

「殺すのが嫌なの？」

「当たり前だろ！？嫌に決まってるよ」

「ふざけないで！」

「……！」

「そんな事言っつてられる状況じゃないってわかってるよね？そんなこと考えたって生き残れない！今は「生きる」そのことだけを考えるべきだよ！」

「ごめん」

「謝る必要なんかないよ。私が付き合わせちゃったことだし……本当にごめん」

そつだ。元はと言えば自分が付き合わせたことなのだ。この罪のない少年を巻き込んだのは自分だ。彼は許してくれるのか。くれないだろう。謝ってもどうにもならない。絵真はゆっくりと、気まずそうに壮のほうを見た。

壮はこちらを見据えていた。

はつきりと完全にこちらを見ていた。もう死体を見ているあのやりきれない目ではない。かといって絵真の不甲斐なさに憤っているわけでもない。しっかりとした、明確な意思を持つ目だった。

「……生き残ろう」

「ごめん」とは言えなかった。ただ「うん」と頷くことしかできなかった。

十、7月21日午後3時18分　ひるがお市・霞町・駅前

二人はあの場から離れることにした。お互い体はボロボロだったが、相手に自分たちの位置を把握させなくなかったし、人ごみに紛れ込むことができれば、敵が裏の人間である以上手出しはできない。

「これ大丈夫なのかな？」

「私は大丈夫だと思うけど……」

自分の口を切つてその血が袖にたれた程度の絵真はよかったのだが、完全に血まみれだった壮は一番被害の少ない三人目の黒服が来てい



た服を拝借したのだが、サイズが完全に大きすぎる。テレビでよく見るSPのような体格をした黒服の持ち物だったので仕方がないのだが、制服買ったての中学一年生よりもさらにぶかぶかでも歩きにくい。

「家に戻らない？ 替えがあるし」

「家に手榴弾投げ込まれても知らないよ。それでもいいならどうぞ」  
「・・・遠慮しておきます」

二人が歩いているのはひるがお市の大通り、夏休みということもあって人通りは多くが学。知り合いに会わないか心配だが、まずは生き残ることを考えなくてはならない。二人の歩む一步一步には何かしら緊張が含まれていた。

壮は通りの真ん中、ちょうど大きな商社ビルのあるあたりにそびえ立つ巨大なディスプレイをながめていた。ニュース番組が流れていて、お隣のあさがお市で、テロリストが音響兵器を使って街を襲撃したというニュースが流れていた。この音響兵器というのも実は何かの能力者の力で、その人も自分たちと同じような境遇なのかもしれないな、と考えているとニュースが切れる。真っ暗になった画面から声が響いた。

「この地域にテロリストが潜伏しています。市民の皆さんは速やかに避難してください」

その数秒後、人々はパニックに陥る。散り散りになってその場から逃げまどう人、恐怖でその場にうずくまる人、彼らは確実に恐怖している。ただ、彼らはその真相を知らない。身元の分からない者から追われるのは恐怖だ。助かる方法が見えない。だからこそ人々はアナウンスで消えた「避難」という言葉にすがりしかたない。その光景は一種の暴動のようだった。

「相手は裏の組織だから表の人間の力は借りれないんじゃないの？」  
「？」

「んー、市民を避難させたところで竜巻でも起こして街もろとも私たちが殺すって腹じゃないかな？」

「それは、穏やかじゃないな・・・」

二人は立ち止まって逃げまどう人々を眺めている。もう少しで戦いが始まるのだが、不思議と心は落ち着いていた。人間、意思が固まると強いのもかもしれない。

「君たち何しているんだ！はやく逃げろ」

快いおじさんが話しかけてくれたが無視する。しかしこのお節介なおっさんは引き下がらない。血走った眼で壮たちの説得を試みている。

「早くしろ！テロリストが来るんだ！」

「あ、大丈夫です」

「大丈夫じゃない！君たちが死んだらお父さんもお母さんも悲しむだろ！」

壮は必死に対応してみるがどうもうまくいかない。ここは逃げるふりをして適当にまくのがいいのだろうが、このおっさんのお節介ぶりを見る限り家まで送ってきそうなので適当に対応しなければならぬ。正直こっちは死を覚悟していたのにこういう何も知らない人がすべてを知っているかのように自分たちをぐいぐい引っ張っていることすると調子が狂う。

「早く！早くしないとテロリストが来るって言ってるだろ！？」

「あ、あの、その、なんていうか、その」

「なんだ、はやくしなさい！」

「僕達がそのテロリストなんですけど・・・」

「いいだろ別に」という感じにサインをそれとなく送る。絵真はそんなことには動じない。というか彼女はもう銃を取り出して安全装置を引いているところだった。こんな不用心なテロリストほかにいないと思う。

「・・・何バカなこといつてるんだ。君もそんな玩具はしまいなさい！」

「つかさ君・・・撃つていいかな？」

「ダメに決まってるだろ」

「もういい！引きずってでも連れていくぞ、うわ、なんだ！？」

その瞬間街に強い風が吹く。おっさんが後ろを向くと、遠くの方で黒い点が飛びまわっている。その中の一つがこちらまで急速に近づいてきて、地面に落ちる。それは、死体。まるで御伽噺おとぎばなしのようだった。しかも、風は強くなり、それは「恐怖」が急速に近づいてくることを意味している。

「つかさ君！！」

絵真は壮の腕を掴んで巨大ディスプレイの近くにある商社ビルに駆け込む。ビルの中にはまだ人がいて、何事もないように仕事をしている。

「避難命令が聞こえてなかったのかな？」

「そんなことは今どうでもいい！」

そう言っただけで絵真は受付のカウンターのようになつた所に飛び込む、壮もそれに続いた。

「伏せて！！」

そう言い終わるか終わらないかのところでガラスの碎け散る音がしてすさまじい風が轟音と共に吹き込んでくる。絵真は壮を張り倒してその上に乗っかるように覆いかぶさった。壮がびくりして手を彼女の背中にまわしたため丁度、抱きあうような格好になった。

数十秒後、静かになつたところで二人は起きあがる。

辺りは地獄絵図だった。

突然の事に対応しきれなかった会社員たちがそこら中で倒れている。ガラスの破片が体中に突き刺さって血を流している。頭を打ったのか、死んだように動かない。あるいは死んだのかもしれない。

「大丈夫ですか！？」

「つかさ君！！」

近寄ろうとした壮を絵真が制す。

「今は松岡ぶつ飛ばすのが先でしょ！？」

「でも、このひと死んじゃうよ！？」

「あなたにその人を助ける力はないんでしょ？さっさとあいつを倒

して医療機関がここに入れるようにするのが先決だよ！」

「で、でも・・・」

「勘違いしないで、私は薄情者じゃない。これが最善と判断したからやってるの」

「わ、わかった。でさ、松岡本人はどこにいるの？」

「知らない」

「えー・・・」

「ま、大丈夫だよ。私ものすごく運がいいから適当にうるうるしてればきつと会うって」

「（本当は無茶苦茶なこと言ってるはずんだけど「能力」だからなあ）分かった、じゃあ行こう」

二人は、倒れる人を飛び越えてビルを出る。外にはもう人はいなかったが吹き飛んだもう人ではない姿態がそこらじゅうに転がっている。

「ひどい、ここまでやるのか・・・」

「この事件全部、私たちのせいになるから」

「・・・そうなんだ」

許せないとか可哀想とかそんなことを考えている段階ではない。生きなくてはならない。絶対に。絶対に。拳を強く握った。向こうのほうから歩いてくる人がいる。二人はそれがだれか知っていた。壮は唇をかみしめる。

「結構早く見つけたね」

「うん・・・」

歩いてくるのは一人の黒服、黒いフレームのメガネ、やせ細った体。「ほう？生きていたか。残念だったなあ・・・もう楽に死ぬなんて甘いことあむりだなあ？え？オイ？」

不気味な笑顔、人が何人死のうが自分には無関係だという高笑い、それは自信な驚異的な「力」に裏づけされてた。松岡洋右は手を軽く上げる。大気がうねりをあげそこに集中しているのが分かった。

「行くよ、つかさ君」

「わかつてる」

壮は銃を取り出し、安全装置を外し、引き金に手をかけた。

## 1 - 3 - 2 「対 Aランク能力者」

十一、7月21日午後3時52分 ひるがお市・霞町・中心街

笹村絵真は考えて戦うタイプだ。というかただの少女が銃と己の身一つで戦う場合、否が応でも頭を使う必要があるのだが。

眼の前、15mほど前には冷酷そうなメガネ男が立ちはだかつている。これが自分、自分たちの敵だ。この男を倒せば自分たちを實際に見た人間はいなくなり、生き残れるはずだ。敵はAランク能力者。「一個中隊と対抗できる」能力を持っている。実際に目の前で、街一つを壊滅状態にしているし、単純な攻撃力は中隊どころこのレベルではない。多分、武装した中隊が頭をフル回転させてようやく対抗できるという意味なのだろう。一般的な中隊の人数は大体150〜200人程度なのに対してこちらの戦力は2人、話にならない。自分は運がいいだけだし、隣にいる少年も能力者3人を数十分で葬ったとはいえ、予測のつかないイレギュラーな因子、信用はできない。つまりこちらの勝てる可能性は限りなく薄い。というか物理的に無理だ。銃しか持っていない中学生がどうやって80m越えの風を発生させることができる能力者に勝てるのだ。蟻が恐竜に立ち向かうようなものだ。しかし、生き残るためには勝たなくてはならない。絶対に、だ。ここで重要になってくるのは自分たちが人間と戦っているということ、そして能力にも欠点があることだ。人間と戦っている以上、付け入るすきはあるだろうし能力に関しても何かしらの欠点が存在するはず。気流を操る能力は銃弾も爆風も毒ガスも完全シャットアウトするという防御面に関してはほぼ無敵の能力だ。今のところはつきりとした弱点などつかめないし、あつたとしても突破口になるような致命的な弱点ではないだろう。今の状況で相手に攻撃するには、暴風の吹き荒れるなか、近づいて発砲という超危険な方法をとらなくてはならない。が、まともに近づいたところで

突風に巻き込まれて即死ということになりかねない。というかなる。そうなるかどうかして「安全に接近して発砲」というのがこのメガネ男を倒す最善の方法だろう。さてどうやって安全に近づくか。いまの距離は15mほど、この距離から銃を撃つても松岡にはかすり傷一つつかない。せめて3m程度は近付きたい。となるとやはり囲戦法が考えられる。どちらかが突っ込んで行って相手がそれに集中している間にもう一人が後ろから狙撃と行きたいところだが成功する確率は低いだろう。松岡はただまっすぐに風を飛ばして前方に立つ敵を二人ともなぎ倒してしまえばいいのだ。と、なると八方ふさがりだ。そもそも基本的に勝機などないのだからまっとうな作戦で勝てるわけもない。

「（仕方ないけど、つかさ君の能力頼み<sup>ちから</sup>ってことになるね）」  
あんな不確定な要素を作戦に組み込むのは正直不安だが、それしかないだろう。力の片鱗は何となくつかめたていたが全部がわかったわけでもないし、能力の性質上、おそらく彼は力を自由に扱うことはできない。もしかしたら絵真自身の能力が暴走してもおかしくない。何が起こるか分からない、あの黒服がそうだったように全身ばらばらということもあり得ることもかもしれない。ただ、その計算を度外視しても「能力を暴走させる」という力は十分強力なはずだ。それに懸けるしかない。

「つかさ君、正面から突っ込んで！」

絵真は腕から指先までぴんと伸ばしてメガネ男を指差し自信満々に言い放つ。

「え！？俺、死んじゃう…！」

絵真的にはそこそこ綿密に練った作戦なのだがそんなこと知りもしない扱は、無茶な指揮官に大軍に一人で突っ込めと言われた部下のようにびっくりしている。

「いいから！自分を信じて！」

「何を根拠に…。」

「大丈夫だから頑張つて！」

「・・・わ、わかった」

壮はなんだかよくわからないまま松岡の方へダッシュする。

「（この程度の説得でAランク能力者に正面から突っ込む気になるのか逆の不思議だよ）」

絵真は壮の後ろで援護射撃（といっても銃器が無効なのだから実際の存在意義はないが）をすることにする。とはいえ、銃は取り出さないし、特別構えもしない。ただ今後の動向を見ているだけだ。

壮は銃を構えて走りながら撃った。反動で思わず転倒しそうになる。松岡洋右は全く動かない、それどころか呑気にタバコをふかしている。タバコの先から出た煙は彼の周りをらせん状に取り囲んでいた。

「・・・（よく突っ込んでくるな、大した小僧だ）」

タバコを持つ手を軽く上げる。すると強烈な風が吹いて、灰色のたばこの煙を四散させ、壮達を襲う。風速にして70m強、ダンプカーが横転するほどの突風、当然、普通の人間は立っていられない。

街路樹が根っこから引きちぎれる。当然銃弾はさっきまでの勢いを殺され、同じくして流れるガラス片などと共に空の彼方へ消えていく。

が、式場壮は倒れもしない、吹き飛ばされもしない。なぜかと言えば彼は普通ではないからだ。強烈な突風が彼を襲った瞬間、その豪風は一瞬にして奇妙な音に変換され、跡形もなく消えた。

「笹村さん大丈夫!？」

「大丈夫、私のところには風が来なかったから」

「それはよかった。（どんだけ運いいんだよ）」

「・・・（何が起こったんだ?）」

松岡は何が起こったか全く分からなかった。能力をいつも通り発動し、気流を操作して突風を吹かせ、それを立っている170cmもない軟弱そうな少年にぶつけた瞬間、その風は不可解な現象に変換された。おまけにほんの一瞬だが気流の操作が利かなくなり、いわゆる暴走状態になって自分の右腕を引き裂いた。わかることは一つ

「（あの小僧は能力者か・・・）」



血の流れる右腕を抑えながらそう思考する。「右腕はもう使えないな」さらに巨大な暴風を起こせばこの程度では済まないだろう。そうなれば迂闊に能力を使うのは危険だ。が、ここで引き下がるわけにはいかない。能力を使わなかったら自分の持つ「一個中隊と対抗できる」程度の力が一気に「一人の人間」程度に激減だ。自分は能力を使わなかったらただの人間なのだ。能力にのみ存在価値があるという自分の性質に少し恨めしくなるが考えたところでどうにもならない。左手を軽く上げる。右手はポケットに突っ込む。動かない腕などただの邪魔な飾りだ。

「（効果範囲は5〜7m、軽めに発動してこれだからMAXやつちまうと死ぬかも知れねエな。それは避けたい。ということは小僧の能力効果範囲に入らないように気流を制御し、まずあのお嬢さんからぶつ殺すつてのが最善だな）」

思考したところには行動はもう終わっている。すさまじい暴風は壮をするりと避けて絵真に直撃した。強烈な風に叩きつけられた彼女は10数m吹き飛ばす。が、運良く風に乗れたことと受け手が上手かったことで無傷。

「（お嬢さんも能力者かな！？）」

壮が突っ込んでくる。手にはばつちり銃が握られている。壮は走りながら銃口を松岡に向け、引き金を引いた。距離にして8m弱。初発砲にしては上出来だった。普通なら銃弾は直撃して敵はお陀仏だ。しかし、敵も普通ではない。銃弾はメガネ男をするりと避けて、その後ろの地面に当たり砕け散った。

「（能力か！？でも、もっと至近距離で撃てば気流では防ぎきれないー！）」

「（操作してる気流が小僧に当たらないように制御しながら銃弾をそらすつてのは、なかなか神経を使う・・・これ以上距離を詰められるとそろそろ危ないな）」

こんなに時間を食うとは思ってもみなかった。早く何とかしないと倒れている人々の命が危ない。別に人の命を心配しているわけでは

なくあまりに多くの無実な人々を殺してしまうと上からの査定が悪くなるのだ。こんな子供二人にそんな時間をかけるわけにはいかない。

「（そろそろ本気でやるか・・・）」

「（押してる）」

と、そう、絵真は確信していた。事実、壮の能力によって松岡は外傷を負っている上、もう壮に対して突風による攻撃をしてこなくなった。そうとう警戒しているわけだ。このまま押して行けば倒せる自信はあった。ただ、油断はできない。壮の能力が極めて不安定ということもあったが、松岡はおそらく自分から殺そうとしているため、このまま攻撃をよけ続けることができるかどうかかわからない。

Aランク能力者から集中砲火など食らったことはないからよくわからないが、自分の「運」でもどうにもならない場合はある。何とか運よくよけきつても、更に攻撃が来てはどうにもならない。さっきの瞬間移動能力者との戦いがそうだった。いくら攻撃をよけてもさらに攻撃を重ねられれば一発は当たる。自分がか弱い中学生女子にすぎないのだから一発食らえばおしまいだ。

とりあえず前線は壮に任せて後ろからサポートに徹しよう、絵真はそう考える。といつても何をサポートすればいいかは分からない。そもそも手榴弾・毒ガス・銃器が無効の相手に対し自分がするべきサポートなど多分ない。要は自分はこのにいたら無駄死なのだ。

街路樹はもう根っこから引きちぎれて何本か倒れているし、ビルのガラスはもうほとんど割れてしまっていて、街はほぼ廃墟だ。そして何より、今街に取り残されている人々の命が心配だ。

「（早く決着をつけないと）」

そう考えていると風が強くなる。当然ながら壮の方へ風は全く吹いていない。

「（今の私はたぶん足手まとい、どこかに隠れてよう）」

絵真は壮を見て、そして体中にガラスが刺さった男性の死体を見た。よく見るとさつき自分たちを連れて行こうとしたおじさんだった。

「（ごめん、頑張るから。）」  
絵真はその死体に背を向けて走り出す。いや、走り出そうとした。しかし、ふと立ち止まる。何か大事なことを忘れていているような気がする。

「（あれ、この人は吹き飛ばされたんじゃないやなくて体中にガラスが刺さって死んじゃったんだよね）・・・つかさ君！逃げて！！」  
「え！？」

壮は慌てて振り向いたが、「もう遅い」とばかりに空から何かがちらに向かつて落ちてくる。風に流されて飛んできたガラスの破片や金属片。無論、松岡の能力によって飛ばされたものだった。つまりこちらに落ちてくる「意思」を持っている。彼の力は能力を暴走させるのであって、それによってできた二次災害的なものには一切の効力を発揮しない。この場合、気流によって運ばれ、壮の一步手前で操作が終了されている（壮の能力妨害範囲に達していない者なので壮の力ではどうしようもない。

その「意思」を持った塊たちが壮に降り注ぎ、腕、体、肘、腕、様々な箇所へ塊たちがぶつかって血は流れ、骨を砕く。気が付くと壮は、うつぶせの状態に倒れていた。

体には激痛が走っている。血の冷たい感触が肌を伝い、寒気が這い上がってくる。どこかを打ったらしい。どこかはわからないが鈍い痛みが響いている。大丈夫だ。と言ったら嘘になる。正直、もうだめなような気がした。だが、諦める気はなかった。力を振り絞って回転し仰向けになる。空が青い。

「（笹村さんと約束したんだ、絶対生き残るって・・・）」  
「よう、気分はどうだ？」

目の前に松岡が立っていた。意外に力ない声だ。右手は相変わらずポケットの中で、左手には銃ではなくタバコが握られ、不気味な笑顔を浮かべつつ一服していた。が、顔からまっすぐ血が流れている。呼吸も不安定で苦しそうだ。「能力の暴走」だとすぐにわかった。このメガネ男もあの青白い液体を飲んだのかと考える。

「大した奴だな、とつさの判断で身構えるのではなく、能力効果範囲まで近づいて俺の能力を妨害した拳句、ダメージまで与えるってのは、なかなかできないね。しかし自分の落としたガラスが体に突き刺さるってのはバカな話だ」

「えっと、おっしゃっていることがわかんないんですが（ただ、びつくりして突っ込んだだけだからな）」

意外とこのメガネ男の物腰が柔らかく、あまり怖くないことに驚く。何とかさつきまでの皮膚を裂くような強烈な殺気が欠片もない。たばこをふかしている目つきの悪い中年男性だ。それでも十分怖いが。

「ああ、無自覚か？」

松岡はくわえた煙草を地面に落とし靴で踏んで火を消すと、ポケットから煙草の箱とライターを取り出し、片手で箱の中からタバコを器用に取り出した後、口にくわえてライターの火をつける。全部片手。腕が使いたくないことがよくわかった。そこまで怪我がひどいのだろうか。その片腕は相変わらずポケットの中でぐったりとしている。

「無自覚って、あなたの能力が勝手に暴走しただけじゃないんですか？」

「そんなわけねえだろ。俺のランクいくつだと思っただ。テメエが能力者でその能力の影響としか考えられん」

「ああ、そうなんですか」

「反応うすっ」

そんなこと言われても壮的には本当に「そうなんだ」ぐらいだったのだ。そう思えばそうだったのかもしれない。自分が特別なことをしているような感覚は、今日起きた一連の事件に飲み込まれて消えてしまっているし、その能力と称されたものも、相手が自滅しているだけなので特別実感はない。手から炎が出たりしたらもう少し実感があつたのだろうか。

「まあどうでもいいですし、そんなことより笹村さんは？」

「あ、あの子か？お前が攻撃されている間に逃げた。」

「そうですね・・・」

「で、どうだ？仲間裏切られた気分は？」

「生きるんなら良かった」

「は安堵の顔を浮かべる。」

「へえ？結構いい奴なんだな、テロリスト。」

メガネ男は不思議そうな顔をした。長らくこの世界にいるがこんなことを言うやつは珍しかった。自分が死ぬかもしれないのに他人の心配しかしていないのだ。当の少年はどうでもよさそうな顔でゆくり起きあがり、背中に付いた砂のようなものを払っている。

「で、僕は殺されるんですか？」

「ま、そういうことだな。ちなみにこの街ぶつ壊したのもお前らつてことになるから。悪くて死刑。良くて死刑だな。もっともテロの被害を最小限に抑えるという名目によりこの場で殺すが」

「笹村さんですか？」

「もちろん、と言いたいところだが、なんだ。お前のその感じが気に入った。特別に助けてやってもいい。」

「・・・結構いい人なんですね」

「はちよつと嬉しそうな顔をしている。」

「数分前にこの街をこんなにしたのはその結構いい人だが」

メガネ男は不愉快そうに言っ煙を吐く。煙はらせんを描くように空気に散って消えた。罪悪感があったのではない。この少年の「人を殺す」という感覚に対しての軽さに少し驚いているのだ。目の前で人が死んでいるのになぜこんな態度をとれるのだろうか。もう何千人と殺した自分ならともかくこの少年が、だ。

「自分で殺したならともかく関係ない人が何人死のうと俺は別に平気なんですよ。俺の話じゃないですか。あ、笹村さんは嫌みたいですけど」

「もう少し優しい少年とかじゃねえのかよ。この場合」

「俺、あなたの仲間3人殺したんですよ。あんまり記憶ないですが。」

そもそも、人を傷つけて自分は心やさしいだって言い張るのは逆に胡散臭いですよ。別に僕は心優しい人間になる気もないし、なれもしない。」

「そりゃそうだな。・・・ちなみに聞くが」

「なんですか？」

「お前は一体、何がしてえんだ？思考回路がわからねえ。勘でしかないが、「頭がおかしい」で済ませねえ何かがある気がする」

「別に、ただ死にたくないってだけです。ほかに目的もない。あと、いまどきの中高生にそんなこと聞いても無駄ですよ。夢のない世界ですから」

「・・・そうか（じゃあなんでそんなに自分の命を粗末に扱うんだ？いや、でも、さっきは命乞いしてたな。この数時間で心境の変化があったってことか。・・・10代の成長は早いねえ）」

「で、俺の処置はどうなるんですか？」

「おまえは銃で一発ずつ撃って行って苦しみながら死んでもらう。」

一応、仲間の敵だ。本当はあんな奴ら知らねえけどな」

そう言いながらも松岡が銃を取り出す気配はない。二本目のたばこを丁寧に吸っているだけだ。壮は別になんの感動もなく。

「んー、却下ですね。死ぬのは御免です」

「ほう？あのお嬢さんがどうなってもいいってか？」

ある程度予想はできていた。この少年が他人の命をどうとも思わないのならあの少女も同様に捨てるのだろうと松岡は予想できていた。「とりあえず自分の命が惜しいですし」

壮はポケットの財布を取り出しながら答える。はたから見ると本当にどうでも良さそうだった。少し血で染まった財布の中身を確認し、帰りにジューズが帰ることが分かった後、財布をポケットにしまい、松岡のほうをまっすぐ見る。

「ま、そんなもんだな。じゃあ特別にお前を助ける。ただ、あの子は惨殺だぞ」

「それも却下です」

壮はまっすぐな目で、そう、はっきりと答える。その眼にはさっきのふ抜けた表情とは明らかに違う、明確な意志が宿っていた。急にはっきりと答えられたメガネ男は絶句している。この少年、行動・言動に一貫性がなさすぎる

「おまえは結局、何がしてえんだ？言ってることもやってることも無茶苦茶だぞ」

「そうですか？どこが？」

「他人がどうなるうと、どうでもいいって言ったじゃねえか。でもあの子は助けるのか？」

「約束しましたしね、絶対二人で生き残るって」

「後だ、俺はお前らのどっちかを助けるっていう意見を出してるのに何で飲まない？」

「どっちかじゃない。両方とる。それだけです」

「この状況で？敵はAランク能力者、見方は逃げた。自分は死にかけ、勝てる見込みがあると思ってるのか？」

「自分の自信を持ちすぎですよ。それに、勝てるか勝てないかじゃなくて、自分がそういう目的を建ててしまったんだから、それに向かって頑張るだけです」

「ふん、しょうがねえな。見込みはあると思っただが・・・死んでもらうぞ」

松岡は左手を上げる。手を中心として旋風がまきおこり、たばこはそれに巻き込まれ青空に飲み込まれる。その眼はもう、さっきの「いい人」のものではない。まさしく人を殺す人間の、まるで獲物に狙いを定めた猛禽類のような、冷静かつ獰猛な眼だった。

壮は近くにあった風によって飛ばされてきた鉄パイプを手にとると立ち上がり、構えた。

### 1 - 3 - 3 「対 Aランク能力者2」

十二、7月21日午後4時7分 ひるがお市・霞町・中心街

壮は大きく息を吐く。そして前方のメガネ男だけを見据える。それ以外の、崩壊した街にも、血の流れる自分の体にも、全く眼もくれない。ただ、まっすぐに、見据える。

距離にして4m、少し踏み込めば一息で踏みこめる位置、それが逆に怖い。相手果てに銃を握っているわけでもない、ただ立っているだけだ。しかしそのさっきは十分に伝わってくる。簡単に踏み込んだら死ぬというのがはつきりとわかる、張り詰めた、死のにおい。

鉄パイプを握る手が強くなる。指の間は他人のものか自分のものか、よくわからない血液でべつとりと濡れている。その感覚を二、三度確かめた後、

壮は突っ込んだ。

松岡は動かない。焦っているわけでもない。かといって余裕だからでもない。敵が実に厄介だからだ。利き腕がやられた状態では敵が中学生ぐらいの子供だろうと格闘には持ち込めない。そして敵の能力の性質上、迂闊に自分の能力を発動できない。

ギリギリまで引きつけて、倒す。

少年が鉄パイプを振り上げたのをしつかりと見極めてから、上げた自分の左腕を微妙に動かす。これは能力を発動する時の癖のようなもので別に意味はない。突風が吹き荒れる。風の発生源は彼の手ではない。数十m離れた別な場所。その風は彼を動かし、結果として少年の攻撃を避けることになった。すかさず体を回転させ、少年の胸元に拳を打ち付ける。少年は一瞬、顔を苦痛で歪めたがすぐに振りおろした鉄パイプを横に滑らせ松岡の横腹に打ち付ける。

松岡は吹き飛んだ。

その攻撃の威力が強烈だからではない、彼の前方から突然突風が起



こり彼を吹き飛ばし結果としてダメージを軽減することになる。彼はそのまま体を回転させ風にふわりとあおられ、ゆっくりと着地する。

遠くから風を起こし、それによって自分の体を動かしながら近距離戦闘を有利に動かす、彼の能力を使った戦いの技の一つだった。

できればこんなものは使いたくなかった。遠くから発動するということはそれだけ風速は弱まり、制御はしにくくなる。最悪の作戦だ。

現にただの怪我をした少年に攻撃を受けた。しかし、しょうがない敵の能力はそれだけ強力なのだ。現に始末に行かせた能力者3人の連絡は途絶えている。おそらく殺されたか、ともかく戦闘不能。自分もずいぶん負傷している。能力については松岡もはつきりとはつかめていない。わかっていることはその能力は「敵の能力を暴走させる」、能力の効果範囲は5〜7m、その5〜7mというのは少年からその距離にある気流を松岡が操作すると自動的に他の範囲の気流も制御不能になり松岡自身に負傷、もしくは命の危険がある距離ということだ。だからそれを避けるためには遠くの気流を操作するしかない。さっきのような風で物を運んで飛ばす方法は少年自身はその物に近づいて能力を暴走させられてしまったのでもう使えない。もっと遠くから運んできたなら暴走させられはしないが彼にぶつけるという精密な動きはさせられない。つまりこの作戦は使えない。しかしこの状態では危険だ。もう銃が有利に働くような距離ではないし、おそらく相手も銃を持っている。そのうえ銃は動かない右腕を突っ込んだ右ポケットに入っている。取り出そうにも右腕は本当に全く動かないし、左腕で撮ったらその隙を突かれ少年は攻撃してくるだろう。

「（かなりやばいな・・・）」

どうにかならないだろうか。そう思案していると、一人の人物が思い浮かんできた。

最初、自分が連れていた部下たちは四人、そのうち三人はあの二人に葬られた。つまりもう一人残っているのだ。あんな名前も覚えて

いない部下に頼るのは気が引けたがどうもそんなこと言っていないのつぴきならない状況だ。ぜひと来てほしかったが、多分来ないだろう。突風に巻き込まれないようにどこかに避難しているかそれとも自分のこの状況を見て逃げたか、どっちかだ。

「（とりあえずは持久戦だな・・・根性出すか！）」

左腕を振り上げて風を起こす。遠くから風をおこす。起こした突風は到達する地点まで操作できないので威力を維持することはできないが元の威力が強力なため到達時に威力が半分も残っていないとしても十分な力がある。その風を後方から受けた松岡は吹き飛ばされ、結果として壮のもとに一瞬で到達する。そして体を捻じり込み、裏拳を思い切り少年に叩きつける。

「・・・！」

自分の頬を拳が襲っても壮は到って落ち着いている。殴られても敵は足が地面についていないのだから踏ん張りがきかず威力は低い。絶対見目を閉じないよう思い切り見開いて拳をしつかりと受け、すかさず鉄パイプをメガネ男の脇腹、さつきと同じ場所に撃ちつけ、腰を回転させ、地面に叩き下とす。メガネ男自身は地面には叩きつけられず、ふわりと吹き飛んで難なく着地する。この風がどこから吹いているのはよくわからないが、ダメージを軽減するためのものだとわかった。しかし、同じ地点を殴ったのだから相当ダメージはあるだろう。

「押している」とは思えなかった。敵の能力を妨害している上で相手と互角なのだ、自分は一応全身動くが向こうは片腕で戦っている。その腕を無理やり動かせば自分など簡単に倒されそうだ。自分はこれで精いっぱい、敵はまだ余裕がある。戦況は五分五分以下だ。さつき食らった裏拳によって口が切れ、頭がびりびりと震えている。血の苦い味が舌で粘っている。覚悟したとはいえ思い切り正面から殴られた。痛いに決まっている。でもやるしかない。なぜか自分が負けるとは到底思えなかった。だから、怖くもなんともなかった。構える。自分からは攻めない。ただの勘だが今、踏み込んだら死ん

でいたような気がする。式場壮は考えるより勘でやる派だ。

「(Don't think feel . (考えるんじゃない。感じる)・・・ってね)」

数百年前の偉い人の言葉らしい。この人はもつと深い意味で言ったのかも लेकिन、壮にとっては自分の感じた通りにやるための言い訳でしかない。そもそもこの言葉は考えるという行為を否定しているようで賛同はできなかった。だが、この言葉が好きだった。息を大きく吐く。

「(でも今は、考えるより、感じるよりもまず、「行つ」ことだ・・・!)」

奥歯をかみしめる。無関係な風が、どこから吹いた。

十三、7月21日午後4時3分 ひるがお市・霞町・中心街

笹村絵真は商社ビルの中を歩いてた。別に目的もない。ビルの中の人ほとんど倒れているかそれとも死んでいるか。いずれにしても動く気配はなかった。非常階段にでもいけば安全だったかもしれないが人の気配もないことからあまり利用されていないのかもしれない。エレベーターを押しても何の反応もなかったから故障してしまったか、それともつっている電線が切れて下に落ちてしまったのかもしれない。意外と人がいなかったことから多少の人は声を聞いて避難していたようだとかわかった。それでもいろいろな機材は吹き飛び、ガラスは壊れ、ビルの中は散々な状態だった。落ちている瓦礫のような何かをよけながら歩く少女の足取りは虚ろだった。

自分はその場から逃げ出したのだ。少年一人を見捨てて、あの「意思」を持った塊の雨の中を走って逃げた。ガラスの破片も金属片も何一つ自分の体に当たらなかった。それが帰ってやりきれなかった。あの少年には、あの場から逃げなかった少年にはすべて当たったのだらう。もしかしたら死んでしまったのかもしれない。しかし、あの場から逃げた自分には当たらなかった。不公平だ。血まみれで横

たわる少年の横顔が脳裏をよぎる。思わず身震いがした。しかし、どうしようもない。もうあの場へ行く勇氣もない。あの、空に見える黒い破片、あの時自分は考えてしまった。勝てるわけがない、と。そしてその打算によって心には恐怖が植え込まれてしまっている。無理だ、あの少年一人では絶対に勝てない。だが自分が言ったところでどうにもならない。

「どうしちゃったのかな・・・」

こんなの自分らしくない。と言いたかったが言葉がつかならなかった。その代りに大きなため息が漏れる。今までこんなことはなかったはずだ。どんな状況でもまっすぐ前を向いていたはずだ。なのに、今はし確か向けない。口元を拭くと、血がべっとりついて、冷たい恐怖が這い上がってくる。死にたくない。死ぬためには逃げるしかなかった。こんなことを頭の中で唱えるように繰り返して自分の行為を正当化してみようとするが、かえって心にぼつかりと風穴が空いたような気がした。

ある一室の前に来る。関係者以外立ち入り禁止と書かれていたが別に関係ない。ドアはガチャリという音を開けて開く。

中は閉め切った小さな部屋であり、あまり空調もよくなさそうだったが、頑丈に作ってあるようで損傷はなく、たくさんの書籍で埋め尽くされた本棚の隅に小さな机と椅子があつてそこに老人が一人腰掛けていた。

「？」

老人は突然の来訪者に驚いているようだ。手にはマグカップが握られていて、湯気がぼわりとたっている。老人はそれを机の端に置くとその深いひげの生えた口をゆっくり開けて

「いらっしやい」

といった。その顔は深いしわが刻まれていたが柔らかい表情だった。

「大丈夫なんですか？」

ちゃんと生きている人がいたということよりも今の自分のこんな心境のまま人に会ったことで、なんだかばつが悪かった。こんな状態

で会うべきではなかったのだ。

「はて？なんのことですかね？」

老人は首をかしげる。どうやら外の異変には気付いていないようだ。それだけこの部屋が頑丈なのかもしれない。とりあえず絵真の頭に浮かんだのは「避難すべきだ」ということだった。

「こんなところいたら危ないです。避難しましょう」

「何故？」

「なぜって・・・」

思わず黙ってしまう。能力者だとか言っても信じてもらえないだろう、とかそういうことではなく今の自分にその資格があるのか疑問に感じたからだ。ついさつき、自分は仲間を見捨てて逃げてきたのだ。仲間を助けられなかった人間にこの老人を安全に保護できるわけもないし、なんだか後ろめたかった。ありえない話だが、あの時自分が逃げずに一歩踏み出していたらと思うとなんだか心が痛くなってくる。

「お嬢さん、ここは結構安全だ。震度6強の地震にも耐えられるし、何より居心地がいい。そうだ、一服して行かんかね？」

そう言つて老人は棚から別のマグカップを取り出し始める。

「あ、あの結構です」

「？何かやることでもあるのかな？」

「その、お気持ちは嬉しいんですが、私はそんなことしている場合じゃないんです」

「何かやることがあるんならこんな所に立ち寄らないはずだが・・・すまないね、老人の単なる邪推だ。聞き流してくれ」

「いえ、いいんです。実は、仲間を大変なところまで置いて逃げ出してしまつて」

老人の表情が少し変わる。

「比喻とかじゃなくて、本当に死んじゃつてるのかもしれない。なのに、私こんなところで道草しているんです。行かなきゃいけないのはわかつてるんだけど、どうしても、足が向こうを向かないんで

す。私、臆病者ですよ。自分でもわかってるんです」

「怖い、という感情は恥じることではないと思うがね？危ないのに突っ込むのはただ無謀なだけだ。君の判断は正しかったのかもかもしれない」

「でも」

絵真は何か言おうとしたが突然老人と視線がぶつかって押し黙る。

それまで自分がなんの意識もなく視線を外していたことに気付く。

老人は目の前の少女を諭すような眼をしていた。奥が深く、吸い込まれそうになる。部屋は息の音も聞こえないほど静まり返る。が張り詰めた殺気もない、ただ、緩やかな雰囲気を感じていた。

「お嬢さんや、君は選択肢を間違えたと言ったな。それを改めるべきだということも知っている。ただな、これだけは知っておいてほしい。改めるといふ行為はさっきまでの自分を否定するということだ。大きな勇気がいる。それを知っていて改めるべきだと考えるならそれでいいが、君は若すぎる。若い者のすることはあまりにも軽率だ。本当はもっと、一瞬一瞬の自分に誇りを持って突き進むことが大事だ。それが正しかろうとなかろうと大きな問題ではない。自分が一度考えたことを曲げることを簡単にはいけないのだ。・・・おっと、済まない。説教が過ぎたな。しょせんは老人の戯言、本気にしないでくれ」

「・・・」

老人は無言でマグカップを渡す。絵真はそれを両手で取って一口含む。暖かい液体が体に流れ込むのを感じた。

「苦い・・・」

「すまない、お嬢さんには苦すぎたかな？」

「いえ、・・・私、どうしたらいいんでしょう？」

「・・・残念ながらそれは私が決めることではない。君が決めることだ。ただ、アドバイスをするなら・・・後悔はしないほうがいい。多分、一生後悔する。」

「・・・」

絵真は視線を落とす。目の前の暗い色調のフローリングには何の感情も込められていなかった。唇を噛む。口の中にはまだ血の匂いが残っている。

どうしたらいいのだろう。何をすれば正しいのだろう。このまま式場壮を見捨てて逃げるのか、彼と共に敵と戦うのか。

「やるしかないよね、後悔するのは嫌だから」  
決意を固め、拳を握りしめ、顔を上げる。しかし目の前に老人の姿はない。

目の前にはさつきまで老人だった、血まみれの死体が横たわっていた。

すぐさま後ろに振り向くと、背の高い、黒服の男が立っている。サングラスはしていない。細めた眼から鋭い光がぎらついていていた。

「・・・」

声が出ない。思考が止まるというか、真っ白に飛んでしまった。落ち着くとか、焦るとかいう段階に達してもいない全部真っ白になつて停止してしまった。そのせいでホルスターから銃を取り出すという行動に移せない。何もできない、しないまま固まってしまった。何をすればいいのかということにまで思考が到達しない。

黒服は右手を上にあげる。おそらく能力を使うときの癖なのだろうがそんなことに思考は追いつかない。何もしない、できない。黒服の手の周りから風切り音が発生し、見えない何か飛んでくる。その見えない何かは絵真に直撃するために一直線に飛んでくる。彼女がよけるといふ行動を起こしていない以上、直撃は確実なのだがその見えない何かはなぜか彼女の顔の前で軌道を変え、頬のあたりをかすめる。見えない何か地面に当たるとからんという金属音を立て、姿を現す。小型のナイフ。先端に血が付いている。

絵真の頬を血が伝う、ナイフが高速で飛ばされたため、目元に血がはねていた。かすただけとはいえ、1センチほど抉っているため痛みはあるはずなのだろうが、少女の眼は何の感情も移さない。一応、黒服のほうを向いているはずなのだが、目は何を見ているの

か分からない。何も見ていない。

黒服はまたナイフを投げる。彼自身の能力により、ナイフは数秒間目には見えない。不可視の刃は絵真の喉元へ吸い込まれていく、はずなのだがまたもや軌道を変えて目を掠めて天井に突き刺さる。目元から血がふきだし、少女の眼の周りをべつとりと覆った。

少女は突然、首をがくりと折って下を見る。地面に血がぼたりと垂れ、フローリングに広がる。老人の死体が視界に入ったことが確認できた。

「何でこの人が死んでしまったのだろうか？」と、言う思考が浮かんだ。かわいそうとかこんな罪のない人が、ということではない。この人が死ぬ必要性はあったのだろうか。自分が殺したのだろうか。あの黒服が殺したのだろうか、そんなことはどうだっていい。純粹にこの人が死んだことが嫌だった。そして倒れていた人たちを思い出す。あの人たちだってなにも傷つくことはなかったはずだ。嫌だ、こんなのは嫌だ。

眼の光が蘇る。強い表情に戻る。それはさつきよりも強かった。もう前を向いている。顔の半分には血がべつとり付いていたが目は拭わない。

黒服は構え、またナイフを投げる、投げようとしたがナイフが黒服の手を離れた瞬間、そのナイフはどこかへ消えてしまった。見えなくなったのではない。消えてしまったのだ。結果、ナイフは何も傷つけない。黒服は少し驚いた様子だったがすぐさまナイフを持って絵真に突っ込む。絵真は動かない。そのナイフが絵真に迫ろうとした時、黒服は異変を感じる。

さつき自分が立っていた位置に戻っている。まるで最初から動いていなかったように、ただそんなはずはない。確かに自分は小女に刃を向けたはずだ。ここで黒服はまたもや異変に気付く。ナイフがない。さつき握っていたナイフがない。それどころか体中に仕込んでいたナイフもなくなっていた。どこかに消えてしまった。

少女がこちらを向いている。しつかりと、強い表情。そんなことに



物怖じする世界で生きているつもりはなかったが、なぜかそれに圧倒されてしまった。攻撃的でない代わりに慈悲も何も無い。喜怒哀楽の消えた、ただ強い表情。

少女はこちら向かって歩きだす。思わず避けたくなくなってしまったが、体が動かなかった。なぜかはわからない。この少女になぜか勝てる気がしなかった。心の奥のもっと深い何かが激しく怯えていた。

少女は彼に対して何もしない。まるでそこに何もなかったようにゆっくりと横を通り過ぎていくだけだった。だけだったが、黒服はそのことに恐ろしい冷たさを感じた。

数十秒して、少女が部屋を出て行ったのを確認して黒服はがっくりと体を下す。が、ここでまたもや異変に気付く。

さっきまで横たわっていた老人の死体は跡形もなく消えていた。

1 - 3 - 4 「対 Aランク能力者3」

十四、7月21日午後4時17分 ひるがお市・霞町・中心街

松岡洋右はガラスの破片が飛び散った町の中心で煙草をくわえながら立っていた。彼の体の周りには風がらせん状にまとわりついている。これは銃弾等、外部の攻撃をシャットアウトするためのもので常時、彼の半径2mはこうなっていた。しかし、さつきは発動されていなかった。なぜなら敵である少年が自分の能力を暴走させていたため、むしろそうしている方が危険だったからだ。

しかし今、その風の壁は発動している。何故なら今その少年の能力は発動していない。

周りには松岡一人しか立っていないかつたさつきまで自分と戦っていた少年は目の前で倒れている。能力は発動していないようだ。

勝因はポケットから右手を出して両手で戦ったことだ。最初からこうすればよかったのだろうが、少し余裕を持ちすぎた。相手が中学生とはいえ鉄パイプを持った相手に対して片手ではやはり厳しい。

全然動かなかったのに無理やり引き出したためひどく傷む。ぶらんと下がった手のひらを見ると、むき出しになった肉の間から何か白いものが見えていたが、あれが骨だろうか。一瞬、自分の体ではないような気がした。

動かない腕をもう片方の手で無理やりポケットにねじ込む。それから目の前に転がっている血まみれの鉄パイプと、ボロボロの少年を見た。

死んではいけないようだ但至少とも立てるような状態ではないらしい。所々、内出血した腕がだらりとこちらに向かつて垂れており、本人はうつ伏せでぐったりと寝転がっている。

松岡は銃を構える。

「そこそこ楽しめたが・・・俺に勝つのは無理だったな」

安全装置を外すと、かちりと言う音がした。引き金に指をかける。少年の体がピクリと動いた。うつぶせのまま何かを探すように手を探り、鉄パイプに触れるとそれをしっかりとつかんだ。

松岡はその鉄パイプをけり上げる。血まみれの棒きれは3mほど転がって少年の手に届かないところに到達した。

式場壮はうつぶせのまま顔を上げる。かなり不格好だったが体が動かないのでしようがない。顔を上げた先には銃口が向いている。ずいぶん急な話だと思いはしたが別に焦ってもいなかった。

メガネ男は不敵な笑みを浮かべている。

「よう、死ぬ準備はできたか？」

「はあ・・・」

さてどうしようと考えたが何も思い浮かばない。腕を上げようと思っただが痛くて上がらない。骨が折れているのかもしれない。

ともかくとして銃口が目の前に向いているのだ。

「そう言えば能力が発動してないのか？俺の能力が暴走する気配がないんだが」

「能力能力って俺良くわかんないですよ。実感ないし」

「（あ、こいつの能力、起動型だったか？）まあいい、とにかくお前ももう少しで死ぬんだが、まあ良く健闘したということであの女の子のことは見逃しといてやるよ」

「やたら笹村さんを逃がそうとしますね」

「女の子は殺したくねえんだよ」

「・・・でもあなたが突風で巻き込んだ人たちの中には女性だっていますよね」

「たとえばアリの大軍を靴で踏みつぶして、そこに雌が混じってたとしても罪悪感なんて残るか？残っていたとしても2、3日すりゃ、きれいさっぱり忘れるだろ？」

「なるほど、そりゃそうですね」

「おまえな・・・なんかもう少し正義感とかないのか？なんかこう・・・人の命をなんだと思ってるんだ！！とか」

「しつこいですよ、そんな言っても何の得もないこと言うわけないじゃないですか」

「何だよ・・・ったく近ごろの若い者は」

「だいたいなんで人殺しが殺す相手に正義感求めてるんですか？あれですか？自分の足りないものを相手に補おうとする現象ですか？」

「何でもいいだろ？で、最後の言葉は？」

壮は一瞬だけ何も言わなくなった。松岡は少し不思議に思ったがそもそもさつきからこんな饒舌でいられる方がおかしいのだから何も言わないことにした。急に黙りこくった少年は上の空のような感じではぼ真上を見ている。それから何か確信したように話した

「そうですね・・・そう言えば、その気流の壁ってどういう構造になってるんですか？」

「敵にそんなこと言うわけねえだろ」

松岡の眼が一瞬だけ戦っていた時の眼に戻る。どうもこの少年の目つきが変わって、早く言えば疑わしかった。

「いいじゃないですか、減るもんじゃないし」

「言っておくが能力者の情報は国家最高機密だぞ、俺はこの国の最高戦力「王立神親衛隊」のメンバーだ。そんな安っぽく売るわけないだろ」

「命は金じゃ買えないんですから、いいじゃないですか」

「そんなハートフルな言葉を交渉に持ち出してくるお前が怖いよ・・・ま、冥土の土産つた奴だ。せいぜい聞いとけ。俺の能力は気流を操作するんだが、まず気流をらせん状に体にまとう。んでもってそこに何かが入ると、俺は能力で気流の動きが感知できるから、操作している気流が乱れた、つまりその領域内に異物が侵入したということが観測できるわけだ。そこで突風を起こすとその侵入した者をシャットアウトできる。ということだ。」

「へえ・・・結構単純なんですね」

「まあ大抵は力任せに風を起こせばこの街みたいに木っ端みじんだが。そういえば何でこんなこと知れたかったんだ？まあいい。で、

これで思い起こすことはないか？」

「そう言えば・・・空飛べるんですか!？」

「飛べるが・・・」

「凄いですね!びっくりですよ!」

少年の眼は思春期がおとずれる前の虫取り少年のように輝いていた。松岡は不意を突かれたように呆れた顔をした。

「ああ、そうか・・・(疑った俺がバカだったのかもしれん。よく考えたらこんな状況で策らしい策もないだろう。)」

「んー、俺、視力2.0なんですよ」

壮は体をうねらせていたくないようにしながら徐々につつぶせの状態から座った状態になりながらつぶやくように言う。ガラス片のじやりじやりした音が耳ざわりだった。

気のせいだろうか、松岡はこの少年の口元が一瞬だけ、心なしか緩んだような気がした。

「・・・それがどうかしたのか?」

「俺、眼が悪い人の事はよくわかんないんですけど、メガネの人って視野が狭いような気がするんですよ」

と言いながら壮は足もとに着いたガラスの粉を払おうと上が動かないため息を拭きかけている。表情はさっきの通り感情のない顔、ただ松岡にはそれが作られたものに見えて仕方なかった。

「だからそれがどうしたんだ?」

「気流はらせん状に体を回っている。感知できるのは操作している気流だけ・・・能力っていうの結構、本人の人格が出るんですかね?」

「だからなにが言いたいんだ!？」

「眼鏡っていうのは真上がレンズがかかってないからよく見えないんだと思うんですよ。だから自然と真上を見なくなる。気流がらせん状なものもそういうところの表れですね。たとえば上から人が降ってくる。それもあなたのその能力の効果範囲をすり抜ける・・・つまり真上から。でもあなたのそのらせん状の気流じゃそれを感知で

きない」

「あのな・・・真上って言っても空いてるのは俺の体の直径分、そんなところにつっぱり入るなんて奇跡だぞ、だいたい何でそんな自殺行為をするやつがいるんだ？」

「それはわかんないんですけど・・・とりあえず上向いてみたらどうですか？」

松岡は「なにいつてんだこいつ」という感じで上を向くと、何かがまっすぐこちらに落ちていているのが見えた。それが何なのかは知覚できなかった。その物体との距離があまりにも遠くて見えなかったのではない。その物体との距離があまりにも近すぎてわからなかったのだ。

それがさっきの少女だったと認識できた時にはすでに地面に叩きつけられていた。

十五、7月21日午後4時21分　ひるがお市・霞町・中心街

「まさかビルから飛び降りてくるとは思わなかったな・・・大丈夫？」

「ん・・・足折れてるかも」

「だ、大丈夫？（むしろその程度で済んでる方がすごいよ）」

二人は荒涼とした街の中、座り込んでしゃべっていた。厳密には好きで座っているのではなく、立ち上がれないだけなのだ。商社ビルから決死のダイブを決行した絵真に巻き込まれて頭を強打したAランク能力者、松岡洋右は二人のすぐ横で気を失っている。もしかしたら死んだのではないかと思うぐらい動かない。

あざだらけの腕をぶらりと地面に垂らした壮は、何か思い出したような表情になって、動かない足をどうにかしようと思ひに努力している絵真を見る。

「そう言えば黒服ってこの人も入れて5人いたよね？あと一人は？」  
「見つけたよ、ビルの中で」

「倒したの？」

「それがよくわかんないんだよ。おじいさんと話してたと思ったら急に出てきて、そこからの記憶があんまりないんだけど・・・倒したんじゃないかな？」

「そんな無責任な・・・で、これからどうするの？」

「とりあえず何事もなかったように罪のない現地住民にまぎれて政府の保護を受けるのが妥当だね、でもさすがにAランク能力者の隣にいたら怪しまれるからここから離れたほうがいいと思う」

「でもどうやって？俺は多分捻挫してるし、笹村さんは骨折してるんでしょ？」

「・・・這いずり回って行くってというのは？」

「俺は遠慮しとくよ・・・」

「それと、つかさ君に報告することがあるんだけど」

「何？俺もう歩けもしないよ」

「後ろに敵がいる」

壮が後ろを振り向くと黒服がいた。いや、正しくはスーツの男性。

黒服ではない。見た目は若かったが、体格は平凡でスーツはよれよれ、さつきまで戦っていたプロのような雰囲気が見受けられない。

しがないサラリーマンといった感じた。ただ、普通のサラリーマンと明らかに違う点は眼、一般的な、何事もなく人生を過ごしている人間とは全く違う、強い感情のともった眼をしている。それが普通とは違う人間であることを証明していた。そう、殺気のない、松岡をネコ科の猛獣とするなら何かを極めた達人のような感じだった。

男はめんどくさそうな目で二人の隣に横たわる松岡を見て、その後ゆっくりと二人の方に目をスライドさせ、一つため息をついた。

「はあ、松岡さんやられちゃったのかあ、めんどくさいなあ・・・」  
絵真は銃を構える。が、構えた瞬間に銃を持つ手にとつともない力が加わり、結果として銃は5m後方に吹き飛ばされた。

男は表情一つ変えない。

「勘違いしないでほしいなあ、僕に敵意はないんだけど・・・」

「つかさ君！銃出して！！」

「う、うん」

壮手をぎこちなく動かしポケットから銃を取り出して絵真に手渡す。それを受け取るなり安全装置を取り外して発砲する。

発射された銃弾は1秒もかからず男の前に到達するが、彼を傷つけるには至らない。

男は眼にもとまらぬ銃弾を目のもとまらぬスピードではたき落とした。たたき落とされたことで軌道を変えた銃は地面に当たって跳ね返り、再び男の目の前に到達するが、彼は表情一つ変えぬままものすごいスピードで手を動かしてそれを人差し指と中指で掴んだ。

「んー、忠告しとくけどさ…僕には勝てないと思うよ…きつと」  
壮は目の前で起きたもう実力差と呼べないような、圧倒的な違いに茫然としていた。松岡の風起こしは「魔法」のようなあまりにも非現実的な、本人の起こしている実感がわからないようなものだったが、この男の持つている力、（おそらく能力）はリアルだった。今、実際、目の前で起きたのだ。早すぎてほとんど見えなかったが、何が起きたのかだけはわかった。

「あ、あなたは・・・？」

とりあえず冷静になった絵真は神妙な面持ちで問いかける。男は臍抜けた表情のまま大きく欠伸をした。

「ああ、僕は王立直属親衛隊の矢島やしまかける駆つていうんだけど、あ、松岡さんの同僚だよ。」

「お、俺たちはどうなるんですか？」

「まあまあそんなに話を急がないで・・・ほら、死にたくないですよ？」

「（殺される！！）」

壮は震える手でポケットに入ったもう一本の銃を握りしめる。無駄かもしれないが、生き残りたかった。が、銃を取り出そうとした瞬間手が何らかのような圧力を受けて腕が持つて行かれ、銃は手から離れて宙を舞う。手に激痛が走った。



「ツツ・・・!!」

「とりあえず敵意を持つのはやめてほしいんだよね…ほら、なんていうか、命取りだよ」

「すみません・・・」

「試すまでもなかった実力差を痛感して仕は視線を落とす。矢島と名乗った男は慌てたように」

「いやいや、謝らなくてもいいんだよ、なんか僕がいじめたみたいになっちゃうからさ。と、とりあえずAランク能力者をたつた二人で破ったのはすごいと思うよ。それを上に掛け合えばなんとなく適当な処置は受けられると思うんだ。もちろん僕もお願ひしてみるよ」

「それを信じると?」

「さっ、笹村さんッ!なんか声がとげとげしいよ!!」

「敵だよ!?!つかさ君がリラックスしすぎなの!」

「ま、まあ、無理に信じろとは言わないけど、と、とりあえず死ななくて済むと思うよ」

「矢島は頭をかきながら申し訳なさそうに言う。それを見て仕は思考に入った。果たしてこの男を信用してもいいのだろうか・・・」

「・・・じゃあ、信じます!」

「つかさ君、あんまり敵の言うことに耳を傾けちゃだめだと思うんだけど」

「自信満々に言い放った仕を諭すように絵真が制す。が仕は勢いを止めない。なおも自信満々に話し続ける。」

「このまま戦つても勝てないなら最善の方法を選ぶのが基本だよ。」

「そこで倒れてる松岡って人も結構いい人だったしさ」

「そこまで言うなら別にいいけど・・・」

「このやり取り中ずっと携帯電話で何か打ち込んでいた矢島はようやくやり取りが終わったかという感じで電話を閉じ、身振り手振りを交えつつ話し始めた。」

「とりあえず君たちには選択肢が二つ残ってる。一つはこのままここにいて警察かなんかに発見され逮捕 極刑、」

「それは避けたいです」

「もう一つなんだけど・・・ここではちょっと話せないかな、一応、国家機密事項だし。とりあえずこの場から離れたほうがいいかな」

「あの・・・僕ら立てないんですけど」

「えー、僕の同僚に瞬間移動能力者いないしな・・・あ、松岡さんが一人連れてたよね？連絡してみるか・・・」

「え？そのなんていうか・・・その」

「あー、殺っちゃったのかあ」

「まずかったですか？」

「あの人は人間を移動できなかったから別にいいんだけどさ、うーん・・・とりあえず目的の地まで連れて行こうと思うんだけどさ、普通に持ち運んでもいいけど多分痛みで暴れると思うんだ」

「じゃあどうするんですか？」

「んー、そうだね。眠ってもらおうよ」

矢島はよれよれのスーツの、ボロボロの内ポケットから整髪料の缶のようなものを取り出す。缶にはマジックの雑な字で「眠るやつ」と書いてある。

「・・・それで寝れるんですね？」

「うん・・・あ、ごめん！それ「永遠に」眠るやつだ。」

「・・・それ、僕らが吸ってたらどうなってたんですか？」

「どうなってたって・・・死んでけど？」

「けっこう軽く言いますね・・・」

「まあ、それはそうと、はい、これだね」

矢島は缶が入っていたポケットの中に入った、もう一つの缶を手に取り。缶にはこれまた雑な字で「永遠にではなく普通に寝れるやつ」と書かれている。

「眼を閉じててね。一応目に入るといけないから」

「ああ、はい」

矢島が缶の頭に着いた突起を押すと、先に着いたノズルから期待が二人に向けて発射される。壮は顔に風が当たったことを感じた。「

あ、一瞬で寝るわけではないんだな」と思ったが、どんどん意識が遠のいていって……

矢島駆は大きくため息をつく。やるべきことが山積みだ。とりあえず倒れている三人の輸送。今回起こった事後処理だ。

「さてと、大体、松岡さんは街を壊し過ぎなんだよなあ。自分の能力と立場わかってるのかなあ？壊すよりその後の処理のほうが大変なんだってことを知るべきだよホントに。といっても僕もどちらかといえば壊す側だけだ」

辺りを見渡すと、街路樹は根元から折れ、外套はねじ曲がり、ビルのガラスは歯が抜け落ちたようになっていて、ことごとく道端に破片になって散らばっている。飛ばされている車もちらほらあった。

矢島は異変に気付く。

「（ちよつと待った。規模大きすぎないか？）」

松岡の能力は強力でも所詮は風起こし、車を吹き飛ばすなんて相当な強風だ。そんな大きな力を発動したら自分にも被害が出ないとも限らない。いくら松岡が暴君でもそんな事をやるはずがない。リスクが大きすぎる。そもそも松岡の限界風速は100m弱、そこまでにいたらない。だとすると、何かしらの影響で能力が暴走でもしたのだろうか、ごくたまに能力が暴走するとそれまで自分が抑えていたりミッターが外れて大きな力が発動する能力があると聞いたことがあった。もしかしたら、それなのかもしれない。それはいい。あまり大きな問題ではない。問題は……

「（これだけ暴風が起きて倒れている人が一人もいない！！）」  
暴風の規模を考えれば死者が出ていてもおかしくないはずなのに街には倒れている人どころか一般人の姿が見受けられない。まるで最初から誰もいなかったように閑散としている。しかもだ、矢島は事前に松岡の部下から死傷者の数が多いと連絡を受けていた。それなのに、だ。奇妙、奇妙すぎる。

「（この街で何かが起きたことは確かだな……）」

矢島は胸ポケットを漁り、たばこの箱のようなものを取り出す、が彼は非喫煙者だ。中身はチョコレート、メーカー名の書かれた包装紙をめくってチョコレートを啜え、一息ついた。それからぐっすり眠っている少年少女を見据え、何かしら考えてみる。が、結論は出なかった。矢島はチョコレートを飲み込み、連絡用の携帯電話を松岡のそばに置く。画面はメモ欄で「これで適当に帰ってください」と書かれている。それから少年と少女をそれぞれ小脇に抱える。合計で80キロを超えるはずだが矢島は汗一つかかない。

「（まあいい、僕は僕のできることをしよう）」

そうしてまだ日の高い太陽のほうへ向かって歩き出した。

## 2 - 1 「施設入学」

一、 日付、時刻、場所、いずれも不明

式場<sup>しきばつかさ</sup>は車に揺られながら山奥の道路見ていた。かなり退屈だ。細長くて葉がたくさん付いているだけの、名前もわからない樹木など見ても楽しくない。窓は閉まっているが空気がきれいなような気がした。

車内には壮、絵真、矢島の三人。矢島は運転が苦手だからできるだけ話しかけないでくれと言ったし、絵真はまだ寝ていたし、自分も少し前に起きたところだ。ここがどのあたりなのか矢島は教えてくれなかった。国家機密だから行き先知っているのはえらい役人くらいらしい。あなたがそのえらい役人なのかと聞きたかったが、なんとなく失礼に思えて自重した。自分はなぜか新品のズボンに新品のシャツ、ついでに言えば怪我也完治している。あの後何があったのだろうか。何日か経ったのかもしれない。しかし、それを教えてくれそうなものは車内には一つもなかった。

「俺たちはこれからどこに行くんですか？」

隣で寝ている絵真に配慮した低声で問いかける。絵真は自分に寄り掛かって死んだように眠っていて、起きる気配がない。すうすう、という息の音が触れた肩を通して伝わってきたがなんだか複雑な気持ちだ。矢島は危なっかしい運転をしながら助手席に山ほど積み重ねたチヨコレートの山に手を伸ばし、その中から一つ掴んで包み紙を片手でくるくるとひきはがして口の中に放り込む。

「君たち二人がやったことは結構大罪でさ、上もだいたい怒ってたよ。特に式場くん、君は三人殺ってるからさ、かなりやばかったんだけど、大部分の責任を松岡さんに押し付けたらとりあえず殺さないっていう処置が下った。」

「お手数かけてすみません」

「仕事だからね。大人がみんなこんなだと思っちゃだめだよ」

壮は絵真が起きないようにゆっくりと助手席に手を伸ばしてチヨコシートを取ろうとするが取れないのであきらめる。すると矢島は三つほど掴んでこちらに渡してきた。会釈交じりにそれをもらって一つを口の中に放り込む。温い甘さが口いっぱいに広がる。驚異的なミルク味、もつとビターなのかと思ったがそうでもないらしい。どうやら矢島の味覚が子供っぽいのだ、という見当がついた。

「君たちがこれから行く場所は能力者関連の事件に巻き込まれた子たちが暮らしてる施設なんだ。ほら、見えてきた」

矢島が右のほうを指す。そちらをみると山のふもとに普通の学校と大差ないような外見の施設が田畑の真ん中にぽつんと立っているのが見えた。後ろに公営住宅のような建物が建っているから寮なのかもしれない。あの施設で何日過ごすことになるのだろうか、などと考えていると、車がガタリと揺れる。矢島が指をさしたためにハンドルを切り損ねて車体が岩とかすったのだ。その衝撃で絵真は目を覚ます。

「……あ、おはよう。ここ、どこ？」

「おはよう。どこかは俺にもわからないんだけど、とりあえず死なずに済むってさ」

「ふーん、よかったね」

その瞬間、絵真の口からよだれが垂れて壮の新品の制服にたれる。ものすごくびっくりしたが、過剰に反応してはいけない。あくまでも冷静に

「そと綺麗だね」

「うん……」

危ない。何とかばれずにすんだらしい。壮は肩に付いた彼女のよだれの処理に困ったが、しょうがないのでそのままにしておくことにした。そんなこと知る由もない絵真は寝ぼけた顔で目をこすっている。

「あれ？服が新品になってる。何かあったの？何も覚えてないんだ

けど」

「俺もさつき起きたところだからよくわかんないんだけど。あの施設でしばらくお世話になるんだってさ」

壮の指先をぼんやりとした目で追った絵真はその施設の外觀をしばらく眺めた後、助手席のチョコレートを発見して手を伸ばし、数十個掴んで自分の膝の上に置きパクパク食べ始めた。壮も少々口さびしくなつてチョコレートがほしくなつたが絵真の膝の上にあるものはさすがに取れないので助手席にあるのを何個か掴んで口の中に入れる。

矢島はみるみる減つていくチョコレートを見て複雑な表情を浮かべていたが、ふと思ひ出したように話し始める。

「そついえばさあ、あの後街でちよつとした事件があつただけど心当たりない？」

「さあ、逃げることに精一杯でしたから」

「そう、それならいいんだけどさ・・・絵真ちゃんは？」

壮はどうでも好きそうにチョコレートを口の中に入れる。口の中がだいぶ甘くなつてきたが水が見当たらないので食べるのをやめる。

見ると絵真の周りには空の包み紙が数十個積まれているし矢島も水を飲んだ気配がない。一体どういふ体の構造をしてるんだ。

矢島はもう一つかみチョコレートをとつて食べる。山がもう崩れてきた。

「私も知りません」

「困つたなあ・・・あのさ、君たちが戦つてたあたりの商社ビルの中にお爺ちゃんがいたはずなんだけど、式場くん知ってる？バグループのビルなんだけど」

「いや、僕は商社ビルは一回にちよつと入つたくらいでちよつと・・・」

「私知ってるよ。」

矢島が振り向く。その顔はそれまでの軟さが無い。鋭い、仕事をする人間の眼をしている。

「知ってるのか?!じゃあそのお爺さんがどこへ行ったか知ってる?!」

「・・・天国」

「は?」

「殺されたの。黒服の人に」

「・・・ツ!・・・その後変わったことは?!」

「あんまり記憶がないからわからないんです。気付いたら屋上にいました」

「そう・・・ありがとう」

矢島はチョコレートをゆつくりとる。壮は彼の表情が険しいものになっっていることをミラーで確認できた。矢島は車を少し減速させながら話し始めた。

「協力ありがとう。君達からも何か聞きたいことない?」

矢島は落ち着きを取り戻し、乱れたネクタイを正した。それでもスーツはよれよれだったが。壮は絵真のほうを向いて「何かない?」というサインを送ったが何の返事もなかったので自分のしたかった質問をする。

「あ、あの、これから俺たちはどうなるんですか?無事に家に帰れるんですか?」

矢島は眉を細めた。車内の空気が停止する。それから落ち着きを払って話した。

「国は、君たちを危険視している。かなりね・・・家に帰ることができるのかそんな甘いことは考えない方がいいと思うよ」

「国は俺達を殺そうとしてるんですか?」

壮は真剣な面持ちでミラー越しに聞き返す。矢島もそれ相応の剣幕で話した。

「国だけじゃない。僕が今、君たち二人を殺そうとしても全然不思議じゃない。君たちはもつと自覚すべきだ。敵は君たちが考えているよりももっとたくさんいる。油断したら死ぬ」

「・・・」



言葉には矢島の柔らかさではカバーしきれないほどの厳しさがあつた。壮は思わず視線を落とす。思えば確かに自分たちは自分のしたことに無自覚だったのかもしれない。自分にやったことに悔いはないがそのせいで確実に敵は増えたのだ。どうもやるせなかつた。

車が止まる。ドアが自動で空いた。絵真は足早に降りる。車の中がうんざりだったようだ。ため息をつきながら壮も降りようとすると絵真は膝の上のにあったチョコレートを抱えて壮に寄こしてきた。まるでポケットに入れて持ち運べども言いたげだつた。

「あのお、笹村さん・・・」

「何？敵がいつぱいいることと、このチョコレートとは全く関係ないでしょ？」

不機嫌そうな絵真の顔を壮は視線を落としながら半分だけ見る。

「でも・・・」

「どういふ状況になろうと私は私らしく生きるつもりだよ？つかさ君は知らないけど」

「いや、俺は意見とかないから、その・・・同意でいいよ」

なんとなく、そっけなく答える。本当は、「自分は君みたいに強くはないんだ」、と伝えたかつたが、それを言う勇氣も出なかつた。

「ダメ。自分の意思で生きなきゃ生きてる意味ないよ！」

絵真の口調は厳しかつたが思いやりに溢れていて心が痛くなつた。

ただ、彼女の言う「自分の意思で生きる」ということにどうも同意できなかつた。誰もが立派な考えを持つて生きているわけではな。

自分だつてなんとなく生きてきたし、今回の件は「生きるため」に頑張つただけだ。「生きる目的」なんて大層なものを掴めるほど自分が大きいとは思わなかつた。

だから自分の結論の結論は「絵真について行く」だつた。それのみ従い生きる。何にも考えずにすごい人について行くだけなんて自分は何んて弱い人間なんだと思つたが、同時にこれでもいい気がした。「自分で道を開くより他社に依存する方がうまくやっていける」なんてあさましい計算抜きにして絵真について行くのが正しい道の

ような気がした。

「う、うん・・・でも。笹村さんと同じでいいよ。ホントに・・・」  
「そう？それならとりあえず・・・頑張ろう？それしかないよ」

そういうと絵真は笑って見せた。壮は思わず目線をそらす。こんなキラキラしたものの見えるかという感じだった。そのまま絵真は笑顔のまま矢島のほうを向いて深くお辞儀をする。

「矢島さん！ありがとうございます」

「ああ、うん、がんばってね。」

矢島はとてつもなくどうでもよさそうにチョコレートをほお張っている。それから事務的な口調で「受付で氏名を言えば即入学」ということを伝えた。新品のスボンにチョコレートを詰め切った壮は、パンパンになったポケットに手を添えて軽く会釈する。それから絵真のほうを向く。目の前の少女は入学前の学生のように（実際にそうなのだが）眼を輝かせながら「早く行こう」という雰囲気を出している。

「・・・行こうか？」

絵真は施設に向かって歩き出す。壮もそれに続いた。

「式場くん」

後ろから矢島の声が聞こえた。まだ何かあるのだろうかと振り向くと顔にチョコレートが当たる。壮は思わず矢島を見た。

「これが銃弾だったら死んでいたよ」

矢島は厳しい表情をしていた。していたが不思議と緊張感がない。

口元にチョコレートがついていたからだろうか。

「・・・次から気をつけます」

壮はなぜか笑顔で応えた。矢島も表情を崩した。

「・・・死なないでね。期待してるよ」

「はい」

壮はもう一度軽く会釈してまた振り返り、絵真を追った。

二、 日付不明、午後1時30分、（学校内の時計で確認）ゆうが

「そう言えば今日、夏休みのハズだよな？何で学校やってるんだろ  
う……」

「私たちが一カ月以上気を失っていたって考え方もできるよね」

「俺、宿題やってないんだけど……」

「んー、謝ればたぶん許してもらえるよ、たぶん。」

「ひとつの文に「たぶん」を二回使うと説得力がガタ落ちするんだ  
ね……」

絵真と壮は学校の見取り図を片手に校舎内を歩き回っていた。受付  
に行くは無愛想な30前半のもう嬢と言っているのかよくわからない  
受付嬢がコーヒを飲みながら暇そうにしている、今日入  
学する者だということを伝えたら見取り図一枚を渡してきて「二年  
一組」とだけ呟かれたので、今、その二年一組を探している。

「ごめん、俺、地図が読めないんだけど」

「心配しないで。私も読めないから」

「心配しかできないよ……とりあえず現在地は、一階のトイレ前  
か」

「同じところ一周してない？」

「二周くらいしている気がする……とりあえず階段登らない？」

「目的地ってどこなの？」

「二階じゃないかな？ほら、ここに2Fって書いてあるし」

「Fって何？」

「知らないよ……」階「の単位じゃない？」

「でもそれだったら1Fにつき一回とは限らないよ。2Fにつき一  
階上昇もあり得るよね？」

「ハッ！それは盲点だった……」

「ということは目的地は3Fだよー！」

「でも待って、3Fだとすると3×0.5＝1.5になるよっ……！」

「ということは2＝0.5×4だから目指すは4Fということに……」

」

「・・・何やってんだ？」

声がしたので二人が同時に振り向くと男子トイレの入り口に自分たちと同じ制服を着た少年が立っている。身長は壮と絵真の中間ぐらいで平均よりも少し下くらいだった。ハンカチを出し手濡れた手を拭きながら自分の教室に戻ろうとしていた少年はこちらを呆れた顔でこちらを見ていた。

「あ、あ、あの」

壮は慌てて会話しようとしているがどうもろれつが回らない。少年は怪訝な顔をした。

「何の用だ？早く教室戻らないと授業に遅れるんだが」

「あ、あう、あ」

ちゃんと喋れない。どうも意識ばかり先行して声が追い付いていない感じだった。

「2年1組つてどこか知ってる？」

あんまり必死にあうあう言っている壮を見かねて絵真が代わりに聞く。少年は不思議そうな眼で壮を見ながら答えた。

「あんたら、あれか？転入生？」

「そうだけど」

「ふーん・・・」

少年は少し右上を向いて何か考えるような顔をした後、

「連いてこい。俺も同じクラスだから」

と言つてポケットに手をつ突っ込んで歩きだす。二人もその後が続いた。

「よ、良かったね、いい人そうで。」

「つかさ君、何で君は同年代の子とそんなにも喋れないのかな？」

「いや、それは人それぞれだと思っただよ。うん、」

「クラスに馴染めそう？」

「・・・無理じゃないかな」

「戦う前から逃げ出す人間を負け犬っていうんだよ」

「負け犬がダメだつて誰が決めたのさ？」

道は突き当たつて階段に至つた。先頭をずかずか歩いている少年は一段飛ばしで上がつていくので二人もそれに合わせて小走りになつた。階段を上りきると2Fに着く。少年は急ぎ足で廊下へと歩いていく。

「ダメだよ！それはまだ一階だから。目的地は4Fでしょ？」

「・・・何をバカなこと言つてんだ？」

少年は絵真の説得を無視して階段を出て一番最初にあつた教室に入る。二人も続いて入つた。

人数は20人ほどと少なかつたが、至つて普通の教室だつた。まだ授業が始まつていなかったよつで生徒たちは互いに談笑している。

「転校生連れてきたぞ！」

教卓の真ん中に立つた少年の声で生徒たちの視線は一気にこちらを向く。壮は顔をそらし、絵真は笑顔をつくつた。

「それじゃあ、自己紹介頼む」

そう言つて生徒は自分の席に着いてしまう。どうしたらいいのかわからない壮は何とかしてもらおう絵真のほうを向くが

「笹村絵真つていいいます。これからよろしく。」

相談しようと思つていた相手はもう既にクラスに笑顔を振りまいていた。

そうなると自然にクラスの視線が自分の方に集まる。絵真はもう自分の席だと言われた所に着いて隣の女子と話している。「クラスに溶け込むの早過ぎ」と思ったがクラスの人気者になるには必要なスキルなのだろう。こうなつてしまつともう学校の人間でないのは壮一人となつてしまった。「早くなんか言えよ」という空気がクラスに充満してきた。まずい。どうにかしないと、頑張つて口を動かす。

「あ、ああ、あのつ、式場壮つていいいます、そのつ、よろしく・・・」

まずいまずいまずい。教室の「なんだこいつ？」感が半端じゃない。

押しつぶされそうだ。

「ごめん、つかさ君、ちょっと恥ずかしがり屋さんだから。みんなよろしくね」

絵真が立ち上がったってフォローした。なんとなく拍手が起きる。そのまま、なんだかよくわからない表情で自分の席らしき場所に座る。とても「ありがとう」と言いたい気持ちだった。冷静に考えてみると最初からフォローしてくれたらよさそうなものだが。

席に座ると机の中に色々入っていた。教科書、ノート、文房具、それと腕時計。とりあえずノートと文房具を一通り机に並べる。「この腕時計はどうするのだろう？」と辺りを見渡すとどの生徒も手首にこれをつけていたのでとりあえずはめてみることにした。

脇腹のあたりをペンでつつかれる。思わず背筋がぞくつとした。そちらの方向を見るとさっきの少年だった。どうやら隣の席だったようだ。（絵真は彼を挟んで向こう側の席、なお既に女子と意気投合中）

「よう、転校生。」

「ど、どうも」

「別にかしこまらなくてもいいぞ。俺そついうの嫌いだから」

「う、うん・・・」

少年は相当ぶつきらぼうな感じで、喋り方からもあまり素行のよさそうな生徒には見えない。しかし、机の上の教科書は神経質なまでに机の端に揃えられていて、そのラインに沿って四角い筆箱がこれまた正確に置かれている。相当綺麗好きなのが予想できた。しかし少年の話し方はやはりぶつきらぼうだ。よくわからない。

「シキバだっけ？数学の式に場所の場？」

「そつ」

「変な名前だな・・・俺は鷺見信孝、（すみのぶたか）。鷺を見る」と書いて鷺見。よろしく」

「・・・よ、よろしく」

会釈するが、自分でもびっくりするぐらい、例えるならジェットコ

「スターのガクンとなる段差のように高角度な会釈になってしまっ  
た。

当然、信孝はこちらを不審そうな眼で見ているが、何とか緊張に気  
付けてくれたようで優しい表情をしてくれた（といってもあきれ顔  
だった）。それから自分のノートを一枚破り取り、くしゃくしゃ  
に丸めて右手の手のひらに収める。

「面白いものを見せてやるよ」

「？」

得意げな顔をした少年は手のひらを開けて中身を社の机に置く。そ  
れは紙でできた鶴だった。社は困惑を隠せない。確かに少年は紙を  
くしゃくしゃにしたはずだったが、その形跡は見られない。そんな  
ことありえないはずだ。そしてもう一つ、その鶴はどこにも折り目  
がなかった。つまりこの形状はどうやら手作業ではどうやっても作  
れそうにないということだ。一枚の紙からこんな形を作ることが果  
たして可能なのだろうか。物理的に無理なはずだ。

「どうだ、驚いた？」

少年は嬉しそうな顔をする。まるで親に自分の絵を見せた子供みた  
いだった。

「うん、これどうやって…」

「どうやって、って・・・なんとなくわかるだろ？」

「・・・能力？」

「そういうこと。」

信孝が机の上の鶴をまた右手でくしゃくしゃにする。彼が再び手を  
開くと鶴は元通りの一枚のノートになっていた。それを彼が元のノ  
ートに沿って合わせ、右手ですつとこするとノートは破る前のよう  
に元通りになっていて破ったという形跡が少しも残っていないかった。

「す、すごい・・・」

「別にすごいぞ。このクラスの奴らはみんな何かしらの能力を  
持っているし、お前もあるんだろ？」

それでも信孝は得意げにペンをくるくる回す。

「ま、まあ・・・」

「なんだ？歯切れが悪いな？まあいいや、今度見せてくれよ」

「あの、俺の能力っていうのは、その何というか、出そうと思って出せるものじゃ・・・」

「ああ、起動型？それならしょうがないな。機会があるときに頼むよ」

「その起動型っていうのは？」

「ん、起動型っていうのは、特定の行動を引き金として発動する能力だ。例えば、くしゃみするとかな」

「ふーん・・・」

「そういや、そろそろ授業始まるぞ・・・」

そう言っただけで信孝は前を向く。机の上に数学の教科書が置かれているのを見て壮も同じものを出した。自分が来る前に使っていたものは少し違った。絵真は相変わらず女子としゃべっている。

少しすると教師らしき男がドアを開けて入ってきた。入ってきた男はみかけない顔を見てちよっと瞼を上げる。

「ああ、転入生か・・・じゃあ今日の授業は無し！適当に遊べ！こいつらと少しでも仲良くしようと思った奴は学校回って説明してやれ。」

そう言っただけで教師はまた教室を出ていった。

「そういうことらしいから、行こうぜ」

信孝は机のものを丁寧に片付ける。それから胸ポケットにペンを一本差し込み、立ち上がって服装を直す。

「そんな感じでいいの？」

「いいんじゃないかねえのか？いつもこんな感じだぞ？」

どうやら今日に限ったことではないらしい。それじゃあと壮は席を立つがここではとするとする。クラスの大部分は絵真に群がっている。ポテンシャルの差をまざまざと見せつけられたような気分だった。

「ま、そんなもんだって、お前は身分相応にしとけ、行こうぜ」

そう言っただけで信孝は席を立つ。二人の影は他の大多数を残して教室か



ら消えた。

三、 7月23日（壮が信孝から聴取）、2時12分、ゆうがお学園・教室棟廊下

ガコリという音が、少し薄暗い廊下に響く。自動販売機の音だった。信孝はしゃがみこんでジュースの缶をとるとその姿勢のまま壮のほうを向く。壮は窓際に寄り掛かっていた。

信孝と一緒に来てみたものの、どうも絵真が心配だ。彼女に群がっていたのはどう見ても中学生だったが一人一人が何かしらの能力を持った能力者なのだ。能力者というところあの黒服達のような人を殺す人間しか思い浮かばなかった。松岡や矢島はいい人だったが、矢島から聞いたところによると自分たちは例外なのだそうだ。矢島が言っていた通りならここも信用できない。しかし、自分が何でも彼女を心配しているかといえば自分の自己保身のためで、なんとなく情けなかった。

「お前もなんか飲む？」

「いや、いい・・・」

信孝は怪訝な顔をしたが、一瞬考え込んで、

「そついやおまえと一緒に転校してきた子、気になるのか？」

「う、うん・・・物騒なところだって聞いているし」

壮は、はにかみ気味に視線を落とす。

「まあそうだが・・・でもな」

次に壮が顔を上げた時には、目の前にさっきまでジュースの缶だった金属で出来たゆがんだ造形物があつた。割れ目から透明の液体を吹き出しているそれは人の死体に見えるような気がした。

「他人よりも自分の心配しろよ。死ぬぞ」

信孝は少年をにらみつける。彼の予想通りなら壮は少なくとも怯えている、はずだったが目の前の少年の反応はどうも違った。自分自身ではどうしようもないような、いわゆる恐怖の感情が見えてこな

い。何の変化もないさつきと同じ表情、だが、わずかにその表情に強さが含まれた気がする。しかし、もともとこんな表情だったのかもしれない。

「お、教えてくれてありがとう・・・でも俺は、一緒に生き残るって約束したから・・・」

こいつ、一体何なんだ？信孝はなんだか処理しきれないような思いはいつぱいになった。理解不能。ただのバカなのだろうか？バカだとしてもきつと大バカだ。信孝はあきらめたような表情になって金属の造形物を両手で包み込む。もう一度手を開くと金属は缶へ元通りになつていた。それをポケットに突っ込んで信孝は教室のほうへ歩きだす。ポケットはズボンに不自然な形を全くもって付けていなかった。入れる直前にまた形を変えたのかもしれない

「ったく、まあいいや。ならさつきの子、連れてこいよ」

「えっ、あの、それはちよつと・・・」

信孝が望んでいたはずの意見を持ちかけた途端、壮は手を必死に振って引きとめようとしてきた。確実に焦っている。

「お前呼びに行くとか行かねえとかどつちなんだ?!」

「でも、あの、人だかりの中に突っ込んでくのは・・・無理」

「・・・一緒に行くか?」

壮はこくりと頷き。信孝を追いかける。

「そういえばさ、お前、お前らは何でここに来たんだ?」

「・・・家でテレビ見てたら家の前に笹村さんが銃を持って立って脅されたから一緒に政府の施設に爆弾持っていったら爆破失敗してその後国の役人さんと戦ってここに来た」

「・・・お前、利用されてない?」

「そ、そんなことないよ！笹村さんはいい人だし」

「で、笹村は何で政府施設を襲撃しようとしたんだ?」

「なんかPeace makerに所属してるって言ってたような・・・」

「つかさ君、ペラペラしゃべり過ぎ」

壮は思わずびくつとなつたのを見て信孝は結婚詐欺を取り扱った昼ドラを思い出した。教室への階段に行くための曲がり角に笹村絵真は立っている。どうやら壮を探していたようだ。

「そ、その、喋ったことは悪いと思うけど。信孝君はいい人だから・・・」

「お前のいい人への基準甘すぎないか？・・・で、笹村だっけ？あの群がる群衆さん共をどうやって巻いてきたんだ？」

「あゝ、あの人は勝手にいなくなつたよ。「始まる」って放送があったと思つたら一目散に教室を出て行つて・・・」

「本当か！！？」

突然信孝の表情が変わる。それを目の前で見た絵真は驚いたが、一番びくくりしているのはなぜか壮だった。

「何時に「始まる」って？！」

「五分後って言つてたけど・・・」

「五分後か・・・お前から来い！！」

そう言つて信孝はさつきまで歩いてきたのと反対の方向に走り出した。全速力ではないが足音を殺しているのがわかる。まるで何かから逃げているように。

「は、始まるって何が？」

「うるさい！今はそんなこと話してるような暇はねえんだ走れ！」

「つかさ君、行こう！」

「う、うん」

絵真と壮は信孝を追つた。

数分走ると後者の三階の隅の部屋に行きつく。もう生徒は残っていないように、棟全体を不気味な静けさが湛えていた。

現在、三人は壁の前にいる。特に特徴もない、本当に何の変哲もない、壁。他の壁と同じようにしるに面を見せてただ存在しているだけの壁。絵真も壮も首をかしげていた。

「あの、鷺見君？逃げなくていいの？」

「うるせえぞ、黙つてろ」

信孝は指で壁を四角になぞっていく。さっきまであんなに急いで逃げていたのにかなりゆっくりだった。なぞった面は能力によって金属色の縁を見せていった。

一通り何かを終えたように息をついた信孝は、最後になぞっていた中央部に手をつ込む。壮は信孝が壁に手をつ込んだことにびっくりしたがそれが能力であることに納得して落ち着く。常識など最初から通用しないのだ。

信孝が力いっぱい引くと壁が開いた。どうやら壁の裏にはドアが隠されていたようだ。その奥には階段が続いていた。

「.....」

「何をボーっとしてんだ？行くぞ」

「う、うん」

階段を上がっていくと使用禁止と書かれたドアに行きつく。信孝がそれを開くとギシギシとした金属音がする。空が見えて、風が三人の顔をなでた。どうやら屋上に着いたようだ。

「これ、秘密通路ってやつ？」

「ま、そんなとこだな。」

そう言っただけ信孝は屋上と通路を隔てる区切りをまたぐ。二人も続いた。

「フェンスから下、覗いてみるよ。面白いぜ」

二人は子供のような眼で恐る恐るフェンスにしがみつき、ゆっくりと下を見た。信孝の表情があまりにも楽しげだったためでもあるがその眼は希望に満ちていた。だが、その希望に満ちた目の輝きは一瞬で打ち砕かれた。

生徒が先生に追われている。逃げまどう子供たちの悲鳴が飛び交っていた。銃声も聞こえる。子供たちはただただ逃げまどうばかりだった。後ろから信孝の声がする。

「面白いだろ？この施設の名物「生徒狩り」。二十四時間、いつ起こるか分からない。先生が生徒を殺しに来る！ただし生徒の側は先生に手出し無用っていう、「ただのイジメ」だ。」

と、信孝は声高に、陽気に話す。しかし、どこか強がりに見えた。壮は絵真のほうを向く。自分は正直、こんなことどうでもいい。心は痛んだが、それでどうしろというのだ。なんとなく解ってしまった。自分にはどうしようもない。たとえ自分になんとかできたとしてもそんな勇氣は起こせない、起こらない。「自分からは」。問題は自分がどうかじゃない。隣にいる彼女がどうか、だ。壮は絵真はじつと見た。下を向いた彼女が再びその顔を上げて唇を動かすのを待った。

「・・・許せない」

濡れた悲痛な声。それで壮の意向は決定した。

「よし、あの人たちを助けよう」

立ち上がってそう宣言し信孝の方を向く。しかし帰ってきた言葉は「ダメだ」の三文字だった。

「なんで！？人が死ぬかもしれないんだぞ！それを放っておけつていいのか！？」

と正論を吐いてみる。心が籠っていないことはない。絵真の考えは自分の意向なのだ。自分の意見を正直に述べた。しかし信孝は冷淡だ。

「俺はお前らの能力が何なのか知らないがやめといた方がいい。先生方は総勢15名、それがみんな銃を持つてる。よつぼどじゃないと助ける前に自分が死ぬぞ」

「で、でも！・・・」

「ここに来てる奴なんて全員能力がらみの前科者だ。別に死んだところはどうってことない」

「そんなの関係ないよ！私は助けたいの！」

絵真が立ち上がる。眼からは涙が垂れていた。壮は下を向いてフェンスでの出来事を凝視した。生徒が一人銃で撃たれるのが見えた。

しかし、信孝は表情を変えない。

「お前は治療能力者か？それとも瞬間移動能力者？精神干渉能力者でもいい、今、この場で逃げてる誰かを確実に助ける能力を持って

んのか？」

「ない・・・けど・・・」

「助けるって言うのは「できる」人間がやることだ！お前にその力があるんだっただらここで証明してみろよ！現に瞬間移動能力の一つでもあつたら倒れた人拾ってここに連れてこれてる！でも現実はできてない！力もないのに無理を望むんじゃないやねえ！！」

絵真の目元に涙がにじむ。壮がそちらの方向を向いた頃には大粒の涙を流しながら崩れ去っていた。

壮が信孝のほうを向くと、あんなに残酷な言葉を言い放った本人は死ぬほど困った顔をしていた。気まずさが前面に押し出されている。思わず吹き出しそうだった。

信孝は頭を掻き毟る。それから壮のほうを向いて再度「どうしたらいい？」という顔をしたので、もちろん無視した。それどころか絵真の方へ歩み寄って彼女の頭をそつと撫でる。

信孝が完全に悪者になる形だ。

「助けてください」という視線が信孝から送られてきたので、意味ありげに首を横に振る。とりあえず、しばらくはこの冷や汗をかいた少年で遊んでみよう。そう考えた。

次は向こうが首を横に振って、それから「ず・る・い・ぞ」と口をパクパクやって伝えてきたので視線をちよつと絵真の方にやったあと「あ・や・ま・れ」と口を動かした。信孝は、ぷるぷる震えている。汗の量も尋常じゃなくなってきた。

ようやく楽しくなってきたところだったが、そんな事を知りもしない潔白清廉な少女、絵真は立ちあがって「つかさ君、行こう」と静かに言っ立ち去ろうとする。その取り巻き、壮も会釈して絵真を追う。信孝はそれを引きとめようとするが声が出ない。なんだか面白かった。

「ちよ、ちよつと、待て」

信孝は何度か空気を飲み込んでようやく声が出たようだった

「何？驚見君と私たちは関係ないよね？」

冷たく言い放つ絵真を見て壮は「本気の人って怖いな」と感じた。

「本当に待てつて！死ぬぞ！！」

信孝も何とか落ち着きを取り戻して説得を試みるが絵真は眉一つ動かさない。

「大丈夫だよ。私達も死んでもどうつてことない前科者だから」

そういつて絵真は歩きだす。壮もそれについていこうと考え、一歩踏み出したがその時何か心に引っかかるようなものを感じて絵真を引きとめた。当然、絵真は困惑する。

「何で？つかさ君まで！！」

怒り心頭の絵真の腕をつかみ、なだめるように壮は言う。

「いや、ちよつと気になることがあつてさ。・・・信孝君、ここを知ってるのは君一人なの？」

その言葉を聞いた瞬間、信孝はなぜか観念したような表情になる。

「・・・いや、俺だけじゃない。この施設のほとんどの生徒がここを知ってる。」

「なら、何でみんなここに来ないの？」

「いや、みんなが知っているのは学園内に秘密の場所があるつてことだけ、この場所が学校の屋上で、壁に隠されたドアを通して来れるのを知っているのはたった6人、お前らを合わせて8人つてところだ。」

「？」

壮は首をかしげる。どうも辻褄が合わない。というか言っていることの意味がちよつとわからなかった。信孝はその顔を見た後、腕時計をちらと見て息を吐く。

「わかんなくていい・・・もう少しでどういうことか分かる。ちよつと待ってる」

「・・・つてさ」

壮はそう言つて絵真に笑いかけた。

「そんなこと言つたつて人が死にそうなんだよ！？」

絵真は壮の腕をぐいぐい引っ張りながら言う。壮は信孝に「どうす

る？」というような視線を送る。信孝は無理のない陽気な口調で「待つてる、って言ってるんだろ。あと、言わせてもらうとだな、今、お前があいつら助けに行つた方が長期的に見れば死傷者が増えるんだ。解つたかこのバカ」

「なにそれ？ちゃんと説明してもらわないとわからないよ！」

「・・・聞こえないか？」

急に信孝が低声になったため、場が静かになった。辺りは悲鳴や銃声の音でいっぱいになった。

「？」

絵真は耳を澄ます。確かに銃声や叫び声に交じって何か聞こえる。

「・・・もう少しで戦いが終わるな」

信孝は腕時計をいじりながら話す。それから思い出したように胸ポケットのペンを引き抜いてポケットに入れた。

「何でそんなことが」

絵真がそう言いかけた瞬間、屋上に恐ろしい音が叩きつけられた。それと共に発生する強風。絵真がおもわずフェンスにしがみつくとフェンス自身も風に揺られてがしゃがしゃという音を立てた。

眼も開けられないほどの強風が三人を揺らす。かすかに見えた信孝は、それがいつもの事であるかのように平然としていた。

風が終わり、信孝のほうを向くと、彼の目の前、屋上の中央付近に少女が立っているのが見えた。その腕には血まみれの少年が抱えられている。少女の手からその少年がどさりと落とされると信孝はすぐさまそれに飛びついた。

「いつ撃たれた?!」

「始まってすぐ。茂み付近で倒れてた」

少女は血まみれの服をうつつとうしそうにいじりながら言う。どうもほんの一瞬前まで死にそんな人間の体を持っていた人間の感じがしなかった。

「銃は？体を貫通したのか？」

「わかんない」



信孝はその言葉を聞くなり少年の銃創に手を伸ばし指を突っ込む。生徒の体がびくりと動き、暴れだす。見ていられなかった。

「我慢しろ！！暴れると死ぬぞ！俺だって心臓まではちゃんと治せるか自信がない！」

そう言いながら信孝の腕にはより力が入った。当然生徒はもつと暴れだし、それを少女が取り押さえる。ずいぶんと壮絶な光景だった。壮はそれを絵真よりも少し離れたところで見守っていた。自分の能力が発動しているかどうかはよくわからなかったが、邪魔になりそうなのは自覚できた。

しばらくして生徒は突然、何か糸が切れたようにぐったりした。信孝は少年の体から手を引き抜き、息をつく。

「痛みのシヨックで気絶、か。そっちの方がありがたいけどな」

信孝の腕は血まみれだったが「手のひら」だけは洗い流したように一滴の血も付いていなかった。そのままポケットに手をつ突っ込んでさっきのジュースの缶を取り出す。平たくなっていた缶は再び、いつも見るような形になって信孝の口元に運ばれる。信孝はジュースを一気に飲み干し、ぱたりと倒れた。すると、その頭上に見える少女は信孝の横腹をそこそこの力でけり上げた。

「ノブ、何で倒れてんの？まだやることなんて山ほど残ってるわよ。銃喰らったこのマヌケの記憶操作に血まみれの服の漂白！」

少女は心底疲れた顔をした信孝の横腹をがしと足で転がす。信孝はぐらぐら揺らされながら心底めんどくさそうに言う。

「俺は記憶操作担当じゃないだろ。つうか、今回は何か知らんが能力が正常発動しなくて大変だったんだ。全く、一体誰が・・・」

壮はギクツとしたが、幸いそれを見ていたのは絵真だけだった。絵真はすこし厳しい表情をしていた。少しでも人命を危険な目にあわせたのが気に障ったのだろう。これには頭を下げるしかない。

「人の命預かってるのよ？次、治すのにこんな時間かかってたら首吹っ飛ばすから」

「できる奴に言われても怖いだけなんだよ。解ったかこのバカ！」

信孝の横腹に本物の蹴りが入る。それを食らった本人は当然ごろごろのたうちまわった。

「テメエは何で人が疲れ果てるときに何で蹴っちゃうかなあ！？思いやりとか思いやりとか思いやりとかねえのか！？」

「それは二発目が欲しいってこと？」

「ごめんなさいマジごめんなさい」

「あ、あの……」

信孝が後ろを振り向くと、絵真がなにか気まずそうな顔でこちらを見ていた。信孝は体をぐいと絵真の方へ起こし、振り向いて服に血のついた少女のほうを見る。

「自己紹介しろってさ。ほら、こいつら今日の転校生。あの式場ってやつが面白そうだったから連れてきた。で、そっちの子が笹村」

「……勝手なことするなって、あと何回言ったらわかるの？」

少女はそう言っただけのほうを見る。壮の背筋が思わず凍った。自分のメンタルではこの人と会話すらままならないだろう。走り出したジェット機の近くにいたら吹き飛ばされてしまうように心も粉々に打ち砕かれてしまうに違いないと、唇が動かない。声は何とか心を追うように出ているが唇が動かないため「あうあう」という不明瞭な音が口から洩れるだけだ。少女は顔をしかめた。

「ご、ごめんね。こついう子だから……」

すかさず絵真がフォローに入る。一時間も待たずに同じようなフォローを二度も受けるとは思っていなかった。壮は思わず下を向いた。少女は「こつちはまともそうだ」というような顔で絵真を見る。少女の眼には心からの安堵感がこめられていて、普段まともな人間に巡り合えていなさそうなことが予想できた。

「えっと、笹村さんだけ？私は稲葉楓いなばかえでっていいいます。多分、しばらく一緒に行動することになるからよろしく」

「よ、よろしく」

絵真は例のごとくで笑顔で返す。

「あつ、あの、よろしく」

壮はぎこちなく会釈する。早くこの状況を終わらせたかった。ただ、楓には気持ち悪いという風にしか伝わっていないようで、なんだか複雑な表情をされた。

楓は向こうにいる気持ち悪い奴をできるだけ無視して、足元にいた信孝をもう一度蹴って息をつく。どうやら彼を蹴ることが習慣化しているらしい。

「もう終わったみたいだし、とりあえず下に降りない？」

「?・・・今日はもう授業ねえぞ？」

「マキが流れ弾に当たって下で倒れてんの。」

「バカかあいつ?自分の能力考えたらそんな前線まで出てくる必要ねえのに」

「下で倒れてる。軽症だけどバイ菌とか入ったら危ないでしょ?」  
信孝は重い腰を上げる。

「とりあえず式場と笹村から運んでやってくれ。次に俺と子のけが人」

「私に指図すんな」

「・・・わかったよ」

楓は壮と絵真のほうを振り向くと、少し伸びをして、それから二人に指示を出す。

「で、お二人さん?耳をふさいでお腹に力を入れて。ついでにちょっと屈んでくれると持ちやすい」

「?」

二人は訳もわからぬまま言われたとおりの姿勢になる。少し窮屈だった。

「しっかり息止めててね。へたすると死んじゃうから」

「あ、あの?これから何が」

壮が言い終わる前に目の前から楓の姿は消えていた。絵真の姿がふっと消えるのが見えた。その瞬間、風が体をなでたと感じ、それに気付いた時には何らかの恐ろしい力が自分の腕を引っ張った。

その力は上にかかり、壮は宙に浮く。そのまま体が上空に投げ出さ

れたようだった。屋上のフェンスよりもずいぶん高くで壮はようやく、一瞬、力が止んだことが確認できた。

止まったことでわかったのは楓が自分と絵真を抱えていることだ。どうやら彼女の能力らしい。しかしそのことがわかった瞬間、壮にまた大きな力がかかる。今度は下だ。

意識できないほどのスピードで体がグラウンドに落下する。そして地面に叩きつけられる寸前で自分にかかる力が止まった。肺にすごい圧力がかかり、体中の空気がすべて吐き出される。骨がきしむ音がしたような気がした。

気付いた時には運動場の土の上にごろりと転がっていた。

楓の姿はない。横には絵真が自分と同じように茫然としながら転がっている。体に別条はない。骨のきしむ音は気のせいだったようだ。ただ、ひどく耳鳴りがする。

「凄かったね……」

「うん……」

「俺、ここでやっていけるか、わからない」

「大丈夫だよ……きつと」

ズドンという音がしたので横を見ると信孝とさっきの生徒が転がっていて、信孝の頭上で楓が腕を組んで立っていた。何ともなさそうなのは楓だけだ。

「くそ、何回やっても慣れねえな……」

生徒は倒れたまま起きる様子がない。「気絶って考えてるよりすいものなのかな」と壮は思った。

「さつさと起きなさい、このヘタレ。仲間が大変なのよ」

しかし、信孝は起き上がらず一瞬息を払って

「……言っとくけど……この角度からだとスカートの中、見えてるからな」

当然蹴りが入る。いや、厳密には蹴りではない。顔面をしつかりと踏みつけ全体重をかけて何度もぐりぐり無言で踏みにじる。ふたたび足が上がると靴の跡が赤くしつかりと付いているのがわかった。

しかしそれも束の間、その足（正確にはかかと）は信孝の鳩尾に思い切り突き刺さる。

「ぐふっ・・・いつか殺す」

「あの茂みに隠れてるから。早く治してきて」

「わかったよ」

信孝は何事もなかったように立ち上がり、100mほど先の茂みに向かって走り出した。楓は一仕事終えてふう、と息をついた。

「さて、私たちは先行こうか？」

「行くつて、どこへ？」

「作戦会議。」

そう言つて楓が歩きだす。二人は依然としてその場に倒れたままだ。「どうしたの？その倒れてる子ならば早くは起きないからほっば」といてもいいわよ」

二人は同時に深い溜息を吐く。

「疲れた」

「私も」

「そんなこと言わずに、ね？」

楓は優しく対応する。初対面だからということもあるのだろうが、こちらの方が彼女の本質なのかもしれない。常識人として適切に戸惑っていた。

「やだ」

「私も」

しかし、壮も絵真も依然として動く気がない。壮はポケットからチョコレートを取り出し食べ始めた。まだ溶けていなかったらしい。

「つかさ君、私も」

「え？ポケットに長時間入ってたやつだけど・・・」

「いいよ、私そういうの気にしないから。あゝ、疲れた時葉やつぱり糖分だね」

「ねえ？」

楓の眉がピクリと動く。嫌な予感が壮の脳裏に走った。

「・・・・・・・・ちよつと空中散歩しない？」

この後、壮は声に出せないほど怖い目に遭ったが、楓はどつやら信孝以外は殴らないらしいことが分かった。ただ、殴るよりも数倍恐ろしい目にあつたので何ということも言えないが。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3972n/>

---

Out Of Control 制御不能

2011年10月7日13時22分発行